

甲虫ニュース

No. 143
September 2003

COLEOPTERISTS' NEWS

日本産ツツキノコムシ科検索図説 II 注¹

——ツツキノコムシ族① (ツツキノコムシ属)——

川 那 部 真

1-1. ツツキノコムシ属 *Cis* LATREILLE, 1796

ツツキノコムシ亜科の中で最大の一群を形成しており、世界で約 320 種、日本からは 24 種が知られる。外見では、体背面が顕著な剛毛で被われる種と、被毛は不明瞭で背面の光沢が強い種の 2 群に分かれる。触角は 10 節、前脚脛節外角は突出するが棘を欠く。同定には♂の二次性徴が決め手になることが多い。♂は腹部に腹孔を具えることで、♀と容易に区別できる。キタツツキノコムシやタイワンツツキノコムシ、タテスジツツキノコムシなどは個体変異の幅が明らかではなく、普通に見られるものの同定が難しい。

種への検索

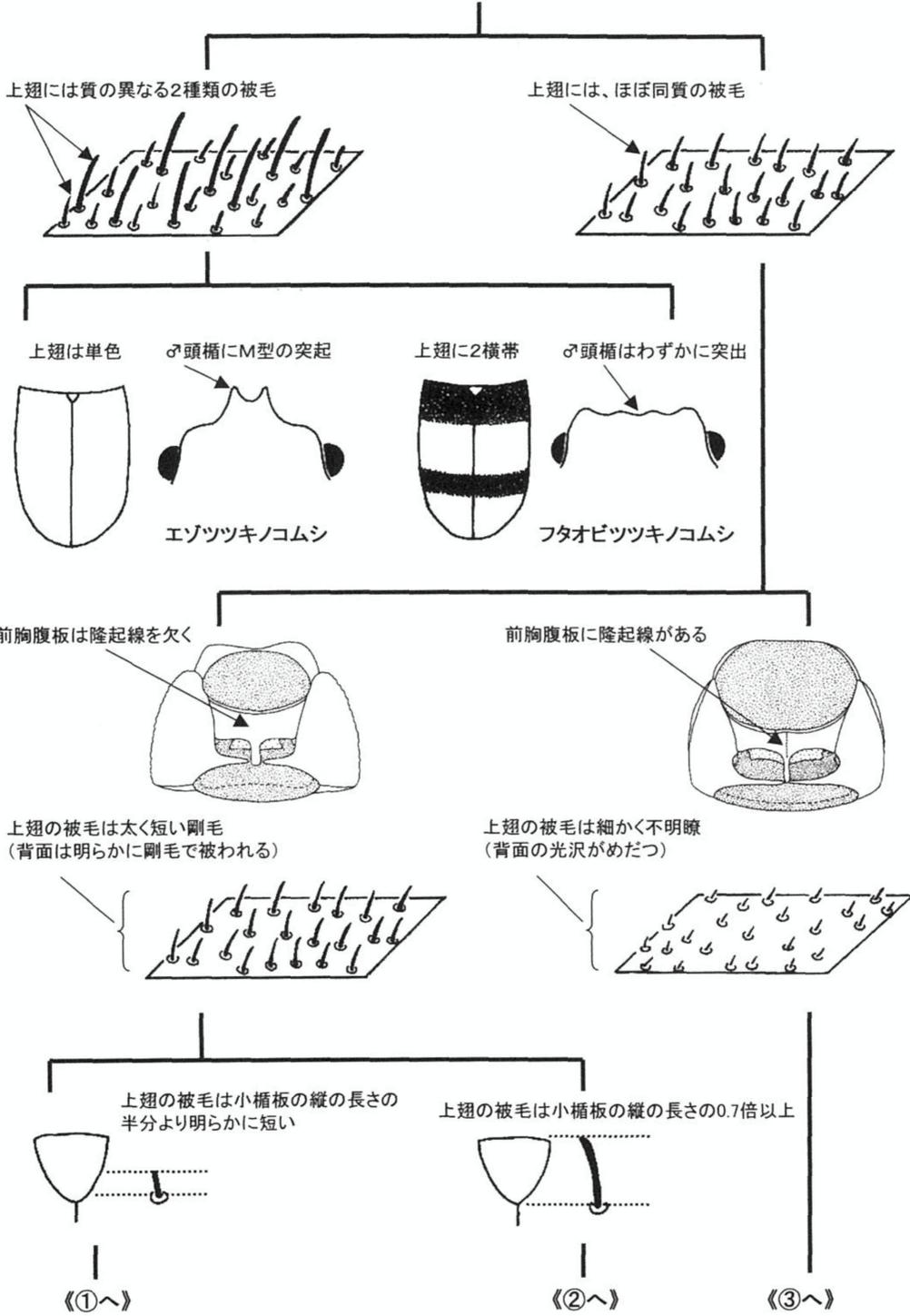
1. 上翅は、長さや傾きが明らかに異なる 2 種類の被毛を装う。2
 - 上翅は、長さが多少異なることはあるものの、ほぼ同質の被毛を装う。3
2. 上翅は 2 色からなり、地色は赤褐色～橙色で基部と中央後方に黒褐色の横帯をもつ。♂の頭楯は両側でわずかに突出し、一對の葉片状突起を形成する。フタオビツツキノコムシ
 - 上翅は単色。♂の頭楯は中央で強く突出し M 型の突起を形成する。エゾツツキノコムシ
3. 上翅の被毛は太く短い剛毛。前胸腹板中央部は膨らむが、中心線に沿った隆起線を欠く。4
 - 上翅の被毛は細かく不明瞭。前胸腹板中央部は中心線に沿って隆起線を形成する。17
4. 上翅の被毛は非常に短く、小楯板の縦の長さの半分よりも明らかに短い。5
 - 上翅の被毛は長く、小楯板の縦の長さの 0.7 倍以上。11
5. 上翅の被毛は部分的に列状となる。前胸背板表面の点刻と点刻の間は明瞭な網目状印刻で被われる。 ...6
 - 上翅の被毛は列をなさない。前胸背板表面の点刻と点刻の間には、明らかな網目状印刻を欠く。7
6. 体は小さく体長 1.4 mm 以下。前胸背板の点刻は疎で、点刻間の距離は点刻直径の 0.5～4 倍。頭部点刻は複眼の個眼とほぼ同大。トウホクツツキノコムシ
 - 体は大きく体長 1.48 mm 以上。前胸背板の点刻は密で、点刻間の距離は点刻直径の 0.5～2 倍。頭部点刻は複眼の個眼より小さい。マルムネトサカツツキノコムシ
7. 上翅の被毛は非常に太短く鱗片状で、小楯板の縦の長さの 0.2 倍以下。8
 - 上翅の被毛は相対的に細長く、小楯板の縦の長さの 0.4 倍以上。9
8. 体は小さく体長 1.36 mm 以下。前胸側縁は反り返らず、上から見ると側縁は隠れてほとんど見えない。♂の前胸背板前縁には明瞭な M 型の突起がある。ササカワツツキノコムシ
 - 体は大きく体長 2.35 mm 以上。前胸側縁は幅広く反り返り、つばを形成する。上から見ると、このつばは完全に全体が見える。♂の前胸背板前縁は中央付近で弱くえぐられるが単純。オオツツキノコムシ
9. 体は長卵形で幅広く、EL/EW は 1.4 以下、EL/PL は 2.08 以下。♂の頭楯は両側で丸く張り出すが、三角状の突起は形成しない。ハバビロツツキノコムシ
 - 体は細長く、EL/EW は 1.41 以上、EL/PL は 2.1 以上。♂の頭楯は両側で突出して、一對の三角状の突起を形成する。10
10. 上翅には暗褐色の不明瞭で不規則な波状斑がある。触角の第 3 節は第 4 節の 1.25 倍。コモンツツキノコムシ

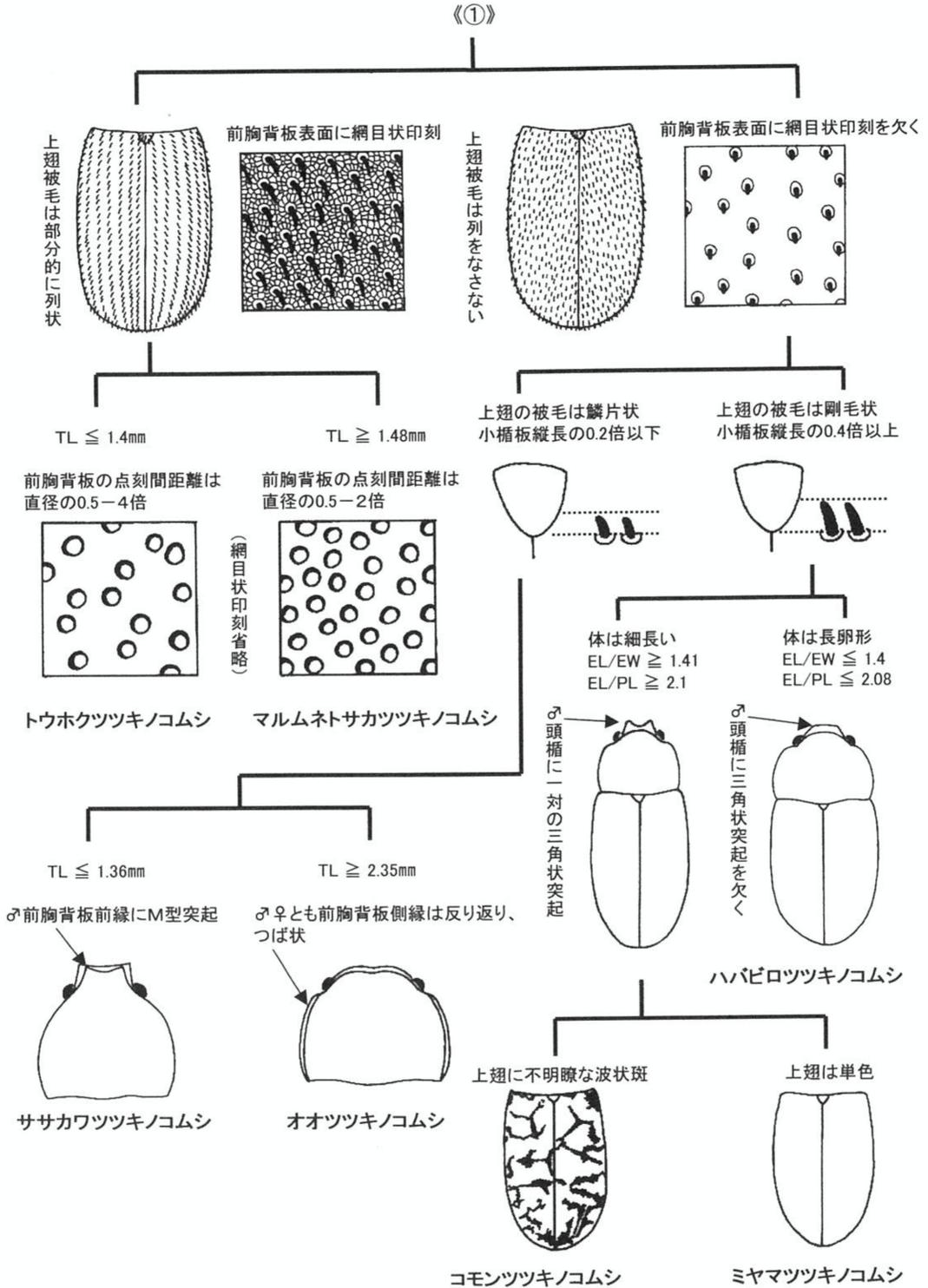
^{注1} Makoto KAWANABE: An illustrated guide to identification of ciid beetles of Japan, II.

- 上翅は黄褐色～暗褐色で単色。触角の第 3 節は第 4 節の 1.65 倍。ミヤマツツキノコムシ
- 11. 上翅の点刻は 1 種類で各点刻はほぼ同大。上翅の剛毛はより短く、小楯板の縦の長さの約 0.7 倍。♂の頭楯は 4 歯状の突起を具える。ミカゲツツキノコムシ
 - 上翅の点刻は 2 種類で、大きく浅いものと小さく深いものからなる。上翅の剛毛はより長く、小楯板の縦の長さの 1 倍以上。♂の頭楯は両側が突出して、一對の三角状の突起を形成する。12
- 12. 上翅は幅広で短く、EL/PL は 1.9 以下。前胸腹板中央部は強く膨らむ。キムネツツキノコムシ
 - 上翅は細長く、EL/PL は 1.92 以上。前胸腹板中央部はわずかに膨らむ。13
- 13. 上翅の剛毛は列をなさないか、列をなしても部分的。前胸背板の剛毛は部分的に波状に配列。♂の腹孔は、腹部腹板第 1 節～2 節または第 1 節～3 節にそれぞれ存在。14
 - 上翅の剛毛は列をなし、前胸背板の剛毛は無秩序に生える。♂の腹孔は、腹部腹板第 1 節だけに存在する。15
- 14. 上翅の地色は黄褐色で、不明瞭で不規則な暗褐色の斑紋がある。ゴマフツツキノコムシ
 - 上翅は暗褐色で単色。ミツアナツツキノコムシ
- 15. 体は大きく体長約 3.5 mm。上翅の点刻は非常に小さく、前胸背板の点刻よりも明らかに小さい。タテスジツツキノコムシ (本種からタイワンツツキノコムシまでの特徴は典型的な標本に基づくもの。例外も多く検索図は未掲載。)
 - 体は小さく体長 3.0 mm 以下。上翅の点刻は大きく、前胸背板の点刻とはほぼ同大。16
- 16. 前胸背板の点刻はより小さく密で、点刻間の距離は点刻直径の約 0.5～1.5 倍。点刻の直径は、小楯板の縦の長さの約 0.25 倍。前脚脛節外角は歯状に突出するが長くはなく、突起の長さは小楯板の縦の長さの約 0.5 倍。キタツツキノコムシ
 - 前胸背板の点刻はより大きく疎で、点刻間の距離は点刻直径の約 0.1～2 倍。点刻の直径は、小楯板の縦の長さの約 0.5 倍。前脚脛節外角は著しく歯状に突出し、突起の長さは小楯板の縦の長さの約 0.7 倍。タイワンツツキノコムシ
- 17. 前脚脛節の外縁は部分的に、弱く不規則な鋸歯を具える。18
 - 前脚脛節の外縁は単純で鋸歯を欠く。22
- 18. 上翅の点刻は浅く、部分的に縦方向につながった不明瞭な列を形成する。♂の頭楯は両側でわずかに伸張し、一對の半円形の葉片状突起を形成する。アラハダツツキノコムシ
 - 上翅の点刻は不規則に配列し、列状に並ばない。♂の頭楯は両側で伸張し、一對の三角状の突起を形成する。19
- 19. 上翅の被毛は相対的に長く、小楯板の縦の長さの 0.2 倍以上。低倍率 (10 倍) でも背面の被毛は見える。コウノツツキノコムシ
 - 上翅の被毛は相対的に短く、小楯板の縦の長さの 0.2 倍未満。低倍率 (10 倍) では背面の被毛が見えない。20
- 20. 前胸背板表面の点刻と点刻の間は平滑。ツヤムネツツキノコムシ
 - 前胸背板表面の点刻と点刻の間は微細な網目状または皺状印刻で被われる。21
- 21. 上翅にある大きい方の点刻は、複眼の個眼よりも大きく、上翅の小さい方の点刻よりも明らかに大きい。大きい方の点刻は、点刻間の距離が点刻直径の約 0.5～6 倍。♂の前胸背板前縁は、弱い中央で明瞭にえぐれる。ニッコウツツキノコムシ
 - 上翅にある大きい方の点刻は、複眼の個眼よりも小さい。大きい方の点刻は、点刻間の距離が点刻直径の約 1～5 倍。♂の前胸背板前縁は弧状で、中央は裁断状。クワイロツツキノコムシ
- 22. 体はやや扁平。前胸背板前縁は突出し、♂では弱く反り返るとともに中央でえぐられる。上翅の被毛は部分的に列をなし、太短く、15 倍に拡大すると見える。♂の頭楯は一對の三角状の突起を形成する。キョウトツツキノコムシ
 - 体は凸状で厚みがある。前胸背板前縁は弧状で、♂でも中央でえぐられることはない。上翅の被毛は無秩序に分布し非常に短く微細、やや立つか横臥し、15 倍の拡大では見えない。♂の頭楯は一對の三角状の突起を欠く。23
- 23. 前胸背板表面の点刻と点刻の間は平滑。♂の頭楯は両側で著しく伸張し、一對の細く長いツノ状突起を形成する。前胸背板前縁は単純な弧状。クワガタツツキノコムシ
 - 前胸背板表面の点刻と点刻の間は網目状印刻で被われる。♂の頭楯は両側でわずかに伸張し、一對の半円形の葉片状突起を形成する。前胸背板前縁はわずかに前方へ伸張する。オチバツツキノコムシ

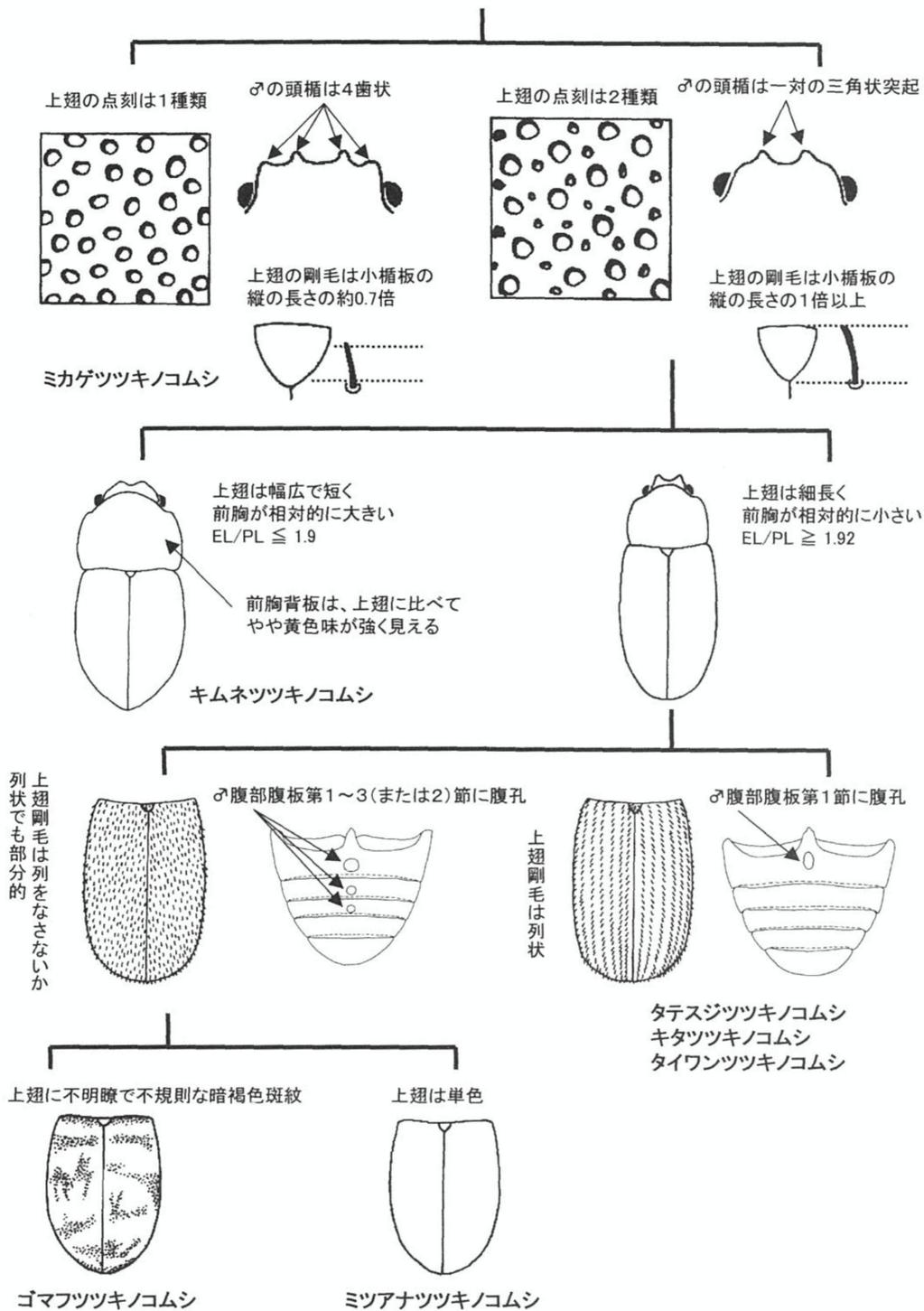
((株)人と自然の環境研究所)

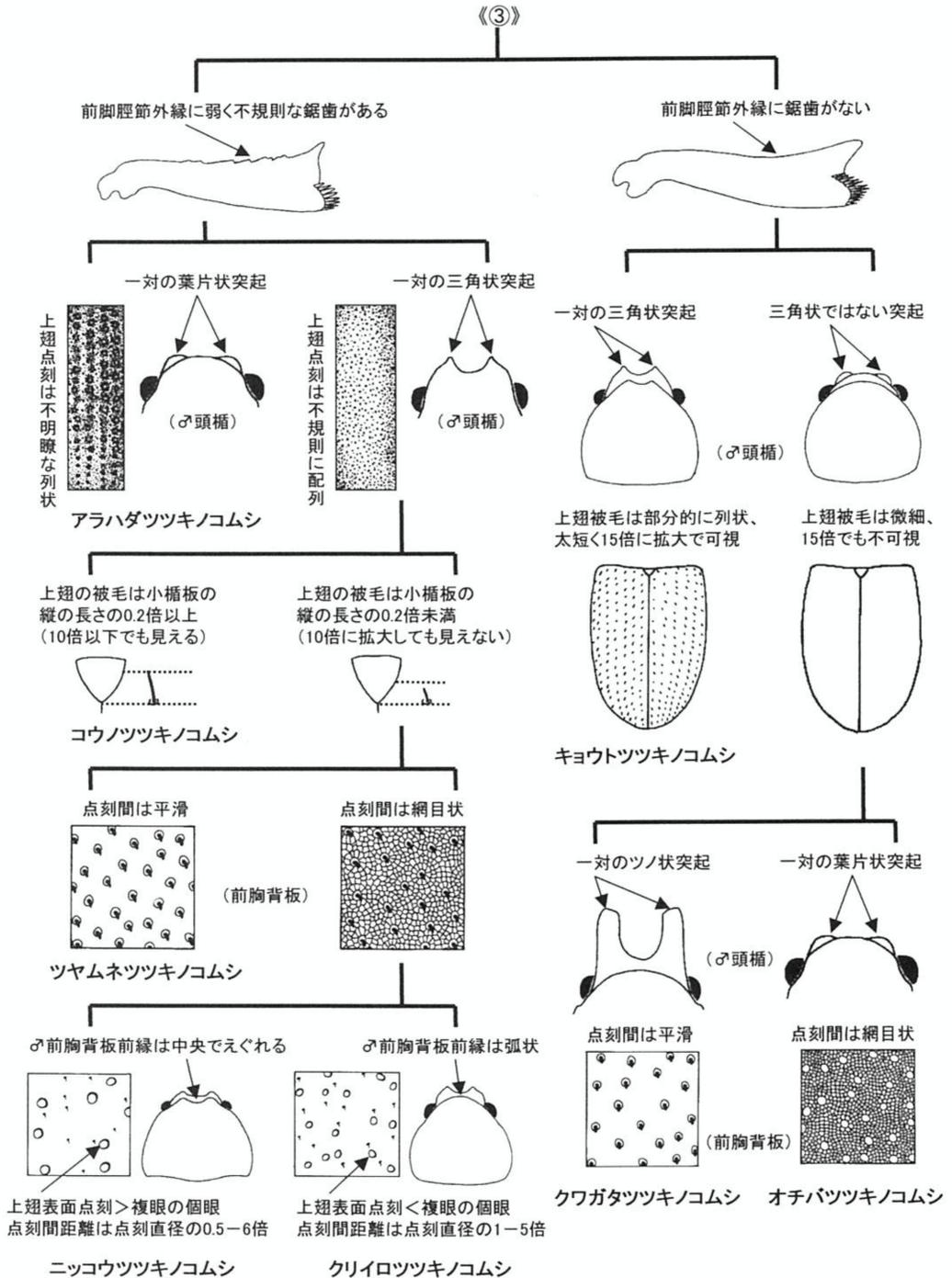
ツツキノコムシ属の種への検索





《②》





日本産コケムシ科 ヒメコケムシ属概説 (1)

保科 英人

Notes on the genus *Euconnus* (Coleoptera: Scydmaenidae)
from Japan, part I.

Hideto HOSHINA

どのような分類群でも、「小さくてわからんやつ」というグループは後回しにされるのがおちだと思うが、「殆どの種が茶色で小さく、図鑑にもろくに載っていない」というコケムシもその例外ではない。最近琉球の材料を中心とした JALOSZYŃSKI 博士らによる研究により、ようやく日本産コケムシのファウナ解明の研究が端を発した、という状況になってきた。既に未発表のものを含め 2 つの日本新記録属が発見されている (JALOSZYŃSKI, 2002 及び同博士の私信)。しかし、保科 (2003) で述べたように、日本を含む東アジア地域で最も種数が多いのは *Euconnus* 属 (和名新称: ヒメコケムシ属) であり、こいつを何とかしなければファウナもくそもないわけだが、日本産既知 9 種の正体は未だ霧の向こう側にある。(勿論十分な海外産種との比較・検討を必要とされるが) 土壌性甲虫の 1 グループで、後翅を欠く種が少なくないという状況を鑑みると、既知 9 種がきちんと把握できるようになれば、かなり日本産新種・新記録種の積み重ねは容易になるのではないかと、残念ながら JALOSZYŃSKI 博士は別に本職があり、著者自身も卒論指導や趣味に没頭せざるをえない、ないしはしたい状況にあるが、待っていても誰かが日本産既知種の「オス交尾器の図つき」再記載をしてくれるなどということは望むべくもないので、やむをえず自分がすることにした。思えば、著者が今まで扱ってきた分類群は ANGELINI や LÖBL といった大御所が PIC や REITTER, PORTEVIN の時代に記録された種の再記載等をしっかりやってくれているので、著者としては日本産既知属の新種記載に関しては、彼らが引いた線路の上を走るだけでよかった。しかし、コケムシの場合、大御所であった故 FRANZ 博士が「コケムシの分類の骨組みを作った」と言うより、「多大なる問題を残して世を去った」と表現する方が正しい (これに関しては追々触れていくことになる)。よって、明治建国の時代に記載されて以降ろくに扱われてこなかった種のタイプを借りて、手持ちの標本と片っ端からつきあわせていく、という地道かつ古典的な作業に没頭していると自分が初めて「分類をやっている」という気分を持って何だか不思議だ。

日本産ヒメコケムシ属に取りかかるさいにやっておくべき 2 つの作業がある。一つ目は当たり前のことだが、既知種の確実な同定ができるようになること。このためには、今まで誰も図を描いてこなかった既知種のオス交尾器を知ることが必要になる。あまり気が進まなかったが、JALOSZYŃSKI 博士の献言 (けしかけ?) により、許可を得て、よそ様から借りているタイプの解剖にふみきった。ルイスの採集品に基づくタイプは、産地や種名が記入されている台紙の上に貼ってあるので、台紙ごと水に浸けて虫を軟化するわけにもいかず、また 1 mm の借り物標本を解剖する気の重さに耐えかねて男泣きに泣いた。二つ目は日本産 9 種のうち、所属亜属が判明していない 7 種を適当な亜属に放り込むこと。FRANZ (1976) は? 付きで亜属つき日本産ヒメコケムシ属の種リストを作製しているが、むろんあくまで? だし、それに亜属への配属の仕方がかなりビントはずれである。これより何度も触れることになろうが、故 FRANZ 博士が現世の後輩たちに残した最大の試練? はこの亜属に関するものである。故 FRANZ 博士は多くのヒメコケムシ属の亜属を全世界から記載したが (NEWTON & FRANZ, 1998)、中身は定義があいまいなもの、既知亜属と明瞭な区別点が記述されていないもの、何でもござれだが、最も厄介な問題は、故博士が大量に記載したヒメコケムシ属の新種のうち少なくない種の亜属が明らかにされていない点にある。つまり、故博士はヒメコケムシ属の論文を書く際、新種記載を優先し、ティビカルな種だけを適当な亜属に放り込んで、それ以外の種に関しては入るべき亜属を一切考慮しなかった、と解釈されても仕方がないだろう。このようなやり方が後世どのような悪影響を与えるか考えたことがあるかと聞いてみたいところだが、今となってはいかんともしがたい繰り言にすぎない。とりあえず、JALOSZYŃSKI 博士の助言や、スロバキアの知人 P. HLAVÁČ 氏から得た欧州産標本との比較をもとに、日本産ヒメコケムシ属既知種の亜属への配置をしていく所存だが、前述の亜属体系の大混乱により、すべての日本産既知種を適当な亜属に整理できることは限らないという逃げ口上をあらかじめ述べておこう。アメリカ産ヒメコケムシ属については、O'KEEFE (2001) が亜属への検索表を示し、とりあえず一定の整理がついた段階のようだが、全世界の亜属体系の確立となるといったい何年先になるか見当もつかない。O'KEEFE 博士も中国から *Scydmaenus* 属の新種を記載したりして (O'KEEFE & LI, 1998)、北米以外の材料も扱っているから、この「大仕事」の達成には最も適任者であろうが、地元の材料の研究に忙しそうなので、とても世界のヒメコケムシ属の亜属の整理などという「巨大プロジェクト」にすぐにとりかかることはできまい。よって、日本産ヒメコケムシ属を今後記載・記録し

ていくさいには、これ以上問題を残さぬよう、所属亜属が判明しているものだけに限定せざるをえないだろう。

このような方針に基づき、日本産ヒメコケムシ属を扱っていく。日本産9種のうち、7種はシャープにより記載されており、ルイスの採集品の基づく記載となれば、それらのうち少なくない種の基準産地が長崎県であることは今更説明するまでもないだろう。保科(2003)で触れたとおり、現在シャープの記載した種のタイプの一部を借りることができ、国立科学博物館の野村周平博士採集の大量の北九州産ヒメコケムシ属の標本が手元にあり、また著者自身幸か不幸か博多に5年間在住したので少なからず北九州産ヒメコケムシ属の標本を有している。そんなことから、とりあえず手持ちの北九州産ヒメコケムシ属を何種かに分けてそれを一つずつタイプとつきあわせていけば、19世紀にシャープによって記載された種は、正体がわかるのではないかと楽観していた。しかし、既に一部の関係者には私信として情報を流しているが、借りたタイプのうち、半数近くの種にあたる標本が手元になく、比較しようがないことがわかった。野村博士の話では、ルイスの採集品に基づ

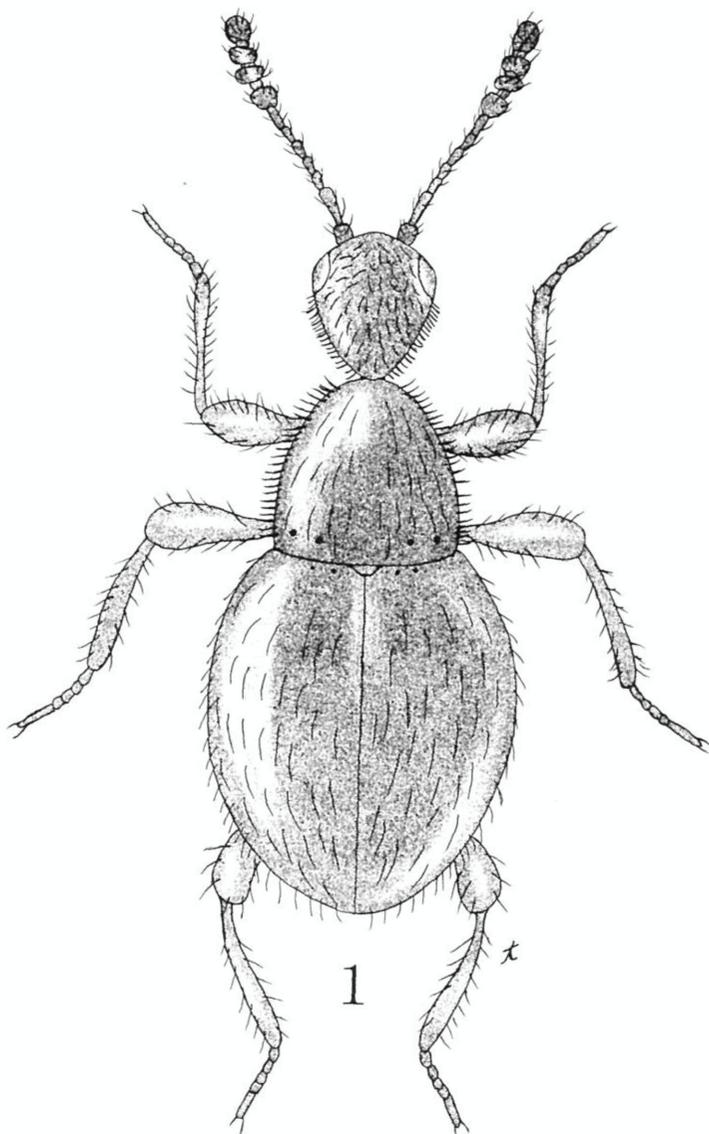


図1. ルイスヒメコケムシ.

いて記載されたアリヅカムシには河川中下流域の河川敷や湿地に生息していると思われる種が相当数含まれているという。よって、今まで著者が採集し、また博士からお借りした標本の大部分は「○×山」という森林性のものが殆どなので、シャープの記載したヒメコケムシ属のいくつかは草原性ないしは湿地性であると解釈すれば、そのような事情も理解できよう。なにはともあれ、日本産ヒメコケムシ属を何回かにわけて紹介していくことにしたい。

***Euconnus (Napochus) lewisii* SHARP, 1886 (図 1)**

(和名新称: ルイスヒメコケムシ)

Euconnus lewisii SHARP, 1886: 47; O'KEEFE & LI, 1998: 159.

Euconnus lewisii: CSIKI, 1919: 50.

Euconnus (? *Euconnus*) *lewisii*: FRANZ, 1976: 59.

分布: 九州.

体長: 1.4-1.5 mm.

FRANZ (1976) は所属亜属の推定のほか、学名の綴りも間違っている。本報告が本種の所属する亜属を最初に示したもので、ということになる。はっきり言って *Euconnus* 亜属とは似ても似つかないので、*Euconnus* 亜属? という推定は全くもってとんちんかんと断定せざるを得ない。しかし、しょっぱなから肩すかしを食らわせて申し訳ないが、*Napochus* 亜属への配置はとりあえず「便宜上のもの」としたい。*Napochus* 亜属は、触覚の球桿部は4節からなり、前胸が円錐形に近く基部で最大幅になるという特徴がある。しかし、本種は、欧州に産する *Napochus* 亜属模式種やその他の欧州産種と比して、前胸の円錐形への「成り方」がクリアではない。欧州産種に基づいて作られた亜属体系へ、日本産種をそのままあてはめようとするのがそもそも無理であることは言うまでもないが、前述の通りヒメコケムシ属に関しては、亜属の一大整理が必要とされているグループなので、現段階ではとりあえず本種を *Napochus* 亜属としておくしかないようだ。このような分類群の場合、「将来変わる可能性がなきにしもあらず」という但し書き付きで最も適当と思われる亜属に配置するのがよいか、変更の可能性があるのであれば、何十年でも「亜属不明」のまま置いておくのが好ましいか、様々な考えがある。著者は前者の意見を持っているが、もしご意見があればお聞かせ願いたい。

さて、本種は久松 (1985) で扱われていないので、日本各地の県別甲虫目録や地方同好会誌でも本種の名は殆ど出てこないと思われる。よって、今のところ著者が知るかぎり本種の正式記録は九州だけと言うことになる。しかし、本種が日本産ヒメコケムシ属のみならず、日本産コケムシ科の中で最も普通種であることは間違いなからう。少なくとも北部九州の森林で落ち葉をふるえば、採れるコケムシの70%は本種であるという差支えない。また、近く別の方が正式に記録されると思うので具体的な地名は挙げないが、九州以外にも分布することは確実である。本種は頭部、前胸背板、上翅とも密〜ほどほどの毛で覆われ、我々がイメージする最もコケムシらしいコケムシである。頭は目の後ろから急激に狭まり、前胸背板後縁には4つのくぼみがある(ただし標本によっては内側のくぼみが不明瞭になることもあり)。

ルイスヒメコケムシの生息地は低地の照葉樹林から山地のブナ、ミズナラなどの落葉樹林帯まで広く分布しているようである。形態的に注意すべき点は、本種が有翅型と無翅型の2タイプがあるところか。前述の通り、本種は大量に採れる普通種であるので、採集された標本全ての上翅をめくって、後翅の有無を調べるなどという時間のかかる作業は行っていない。今のところ、野村 (1997) がアリヅカムシで報告した長翅型と短翅型という後翅の長さとの肩の張りだし云々に類似する関係は本種では見いだしていない。借りたタイプ標本は複数個体あり、オス交尾器を観察することができた。オス交尾器については、英文論文で再記載等をする時に図示することになると思う。なお、著者の研究室において、本種のタイプを調べた JALOSZYŃSKI 博士によれば、博士が所有する本種のオス交尾器と九州産本種の間にはオス交尾器の微妙な形態差があるようだ。しかし、今のところ、「細かい亜種云々」というオサムシの手法を導入するととんでもないことになるので、地域的形態差が存在すると述べるに留めおく。

***Euconnus (Euconnus) japonicus* (SHARP, 1874) (図 2)**

(和名新称: ヤマトヒメコケムシ)

Scydmaenus japonicus SHARP, 1874: 127.

Euconnus japonicus: SHARP, 1886: 47; CSIKI, 1919: 49; O'KEEFE & LI, 1998: 159.

Euconnus (? *Euconnus*) *japonicus*: FRANZ, 1976: 59.

分布: 九州・本州.

体長: 1.6 mm.

本種は *Euconnus* 亜属に分類される。様々な欧州産標本と本種を比較したが、本亜属の定義がしっかりしていることもあり、本種が *Euconnus* 亜属であることはほぼ間違いがない。

ヤマトヒメコケムシは、頭部が丸くて相対的に小さく、また殆ど禿げに近い無毛である。体は全体的にほっ

そりとして、触角は細長く、球桿部は一応 4 節で構成されると言えるが、そもそも球桿部自体がはっきりしない。前胸後縁には 2 つのくぼみがあり、上翅は長めの毛が疎に生え、小盾板近くを走る短い細溝がある。これらの特徴から日本産ヒメコケムシ属他種との区別は容易である。

和名は学名の単なる直訳だが、はたして和名に合致するような分布を示すかどうか。平野編 (1998) の神奈川県甲虫目録には本種の名が見えるなど、本種は本州にも産することになっている。SHARP (1874) の原記載を見ると、「湿地で普通種、Urakami, Nagasaki では特にそうである」とある。著者が見たタイプは 7 個体であるが、それらの標本は全て産地を記述したラベルがなかった。何はともあれ、和名に反して(?) 全国津々浦々で簡単に採れる種ではない。著者は、北部九州はもちろんのこと、北は知床半島、南は石垣島まで様々な森林で落ち葉ふるいをしたが、本種またはその近縁種は見いだせなかった。しかし、つい先日、福井県大野市の妻平湿原で本種の近縁新種の採集に成功した。これらのことから、本種は原記載の通り湿地にのみ生息する種であろう。しかし、原記載では「長崎では普通」と記述されているが、現在の長崎で本種が生息するような湿地がはたしてどの程度残っているのか。

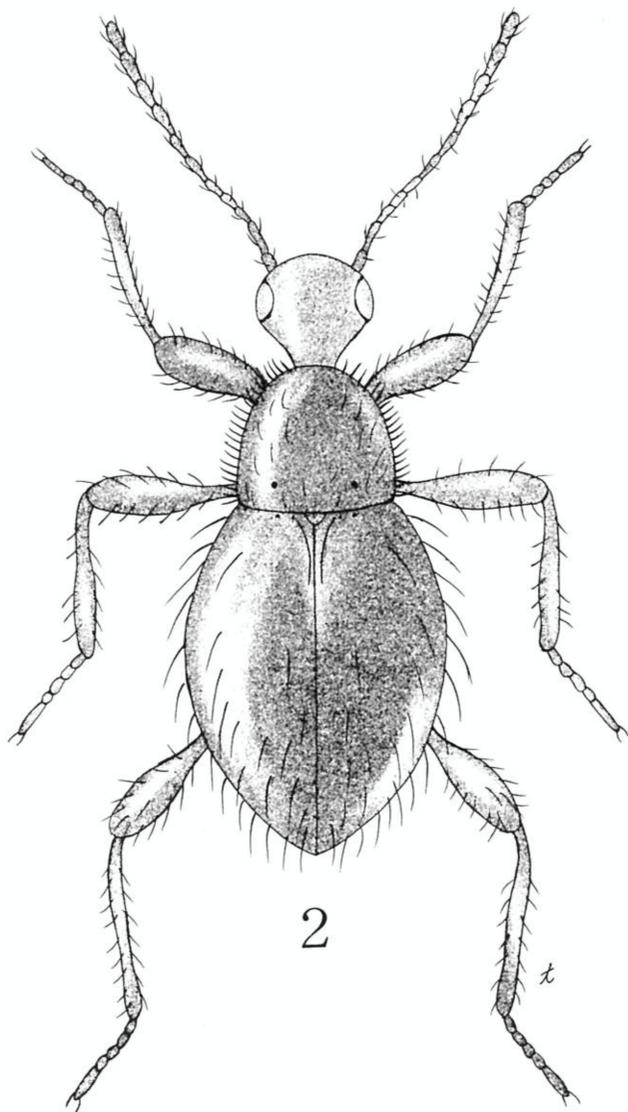


図 2. ヤマトヒメコケムシ.

日本産ヒメコケムシ属の中では、本種のような丸い頭部を持つ種は少なくないが、こういった頭部を持つ種はまず森林では採集されないと思う。山々で採集されるヒメコケムシ属の殆どはルイスヒメコケムシのようなやや細長い頭を持つ種である。とりあえずタイプの雄交尾器も観察できたので、「これはヤマトヒメコケムシではないか?」という標本をお持ちの方がおられれば、それなりの助言はできるものと思える。

***Euconnus schoenfeldti* REITTER, 1891**

(和名定めず)

Euconnus schönfeldti REITTER, 1891: 19; CSIKI, 1919: 51.

Euconnus (? *Euconnus*) *schönfeldti*: FRANZ, 1976: 59.

Euconnus schoenfeldti: O'Keefe & Li, 1998: 159.

命名規約によると、ドイツ語のウムラウト表記を用いた 1985 年以前の学名の原綴りの場合、「e」を後に入れよと言うことになっているので、日本産昆虫総目録の綴り通り、種小名は *schoenfeldti* が正しいと思われる。

さて、端的に言って謎のコケムシである。REITTER (1891) の原記載を読んでも、確実な種の同定に繋がる情報は得られない(手持ちの標本を見てこれかな? という推理はできるのであるが)。SHARP コレクションとは異なり、簡単にタイプを見られない現実を考慮すれば、本種に関してはそのままやり過ごすし、同属他種を扱っていくしかない。つまり、パリ博物館等に問い合わせ、最大限タイプを見る努力をしつつも、それがかなわぬ場合は、今後日本産ヒメコケムシ属の検索表を作る時は「*E. schoenfeldti* は除く」と書くやり方だ。これは分類の哲学に反するやり方だろうが、現実問題として、1 種の正体不明種の存在のために、その属の研究が全く進まなくなるというのは賢明なやり方ではないと判断する。

最後に本編のタイトルから離れるが、別属種について触れておきたい。久松 (1985) で扱われているせいか、地方の昆虫目録で、*Euconnus* (*Microscydmus*) *debilis* (SHARP) コヒメコケムシの名をたまに見かける。現在、*Microscydmus* 亜属は属に昇格している。ロンドンの自然史博物館は、一度に貸し出せるタイプ標本の数に制限があるので、著者は現在全ての日本産ヒメコケムシ属のタイプを見たわけではない。しかし FRANZ (1976) の原記載などの記述が正しいとすれば、日本産ヒメコケムシ属全種の触角の球桿部は 4 節と考えられる。コヒメコケムシの触角の球桿部は先端 3 節なので、ヒメコケムシ属既知種との区別は容易である。しかし、ヒメコケムシ属の球桿部は先端 3~5 節と幅があり、実際、日本各地で先端 3 節の球桿部を持つヒメコケムシ属が希に採集される(これらは殆ど新種であろう)。はっきりとっておくが、「球桿部は 3 節」イコール *Microscydmus* 属ではない。各地で記録されているコヒメコケムシは相当数が再検討を必要とされるものである。更に *Microscydmus* はそうそう簡単に採れる代物ではないと言うことを明言しておく。

今回扱えなかった日本産ヒメコケムシ属の残りの他種については、第 2 報以降で紹介していく所存である。(続く)

参考文献

- CSIKI, E., 1919. Scydmaenidae. In: SCHENKLING, S. (ed.). Coleopterorum Catalogus, pars 12: 1-106. W. Junk, Berlin.
- FRANZ, H., 1976. Neue Scydmaeniden aus Japan, sowie Bemerkungen zu bekannten Arten, *Ent. Bl.*, 72: 51-60.
- 平野幸彦編, 1998. 神奈川県産甲虫類目録. 神奈川県虫報特別号, 2: 35-124.
- 久松定成, 1985. コケムシ科. 上野俊一ほか編. 原色日本甲虫図鑑, 2: 239-241.
- 保科英人, 2003. 東アジア産ハネカクシ上科のマイナー甲虫たち. 昆虫と自然, 38(2): 15-18.
- JALOSZYŃSKI, P., 2002. First record of the genus *Horaemorphus* SCHAUFUSS (Coleoptera, Scydmaenidae) from Japan, with description of a new species. *Bull. nat. Sci. Mus., Tokyo*, Ser. A (zoology), 28: 223-232.
- NEWTON, A. F. Jr. & H. FRANZ, 1998. World catalog of the genera of Scydmaenidae (Coleoptera). *Kol. Rdsch.*, 68: 137-165.
- 野村周平, 1997. アリヅカムシの飛翔—微小甲虫の飛ぶメカニズム. インセクトリウム, 34(2): 22-30.
- O'KEEFE, S. T., 2001. Scydmaenidae. In: ARNETT, R. H. Jr. & M. C. THOMAS (eds.). American Beetles, vol. 1: 259-267. CRC Press LLC.
- O'KEEFE, S. T. & J. K. LI, 1998. Review of the Scydmaenidae (Coleoptera) of eastern Asia, with particular reference to *Scydmaenus*, and description of the first scydmaenid from Hainan Island, China, *J. N. Y. Ent. Soc.*, 106: 150-162.
- REITTER, E., 1891. Neue Coleopteren aus Europa, den angrenzenden Ländern und Sibiren, mit Bemerkungen über bekannten Arten. *Zwölfter Theil. Deut. Ent. Zeit.*, 35: 17-36.
- SHARP, D., 1874. The Pselaphidae and Scydmaenidae of Japan. *Trans. Ent. Soc. London (1874)*: 105-129.
- SHARP, D., 1886. The Scydmaenidae of Japan. *Ent. month. Mag.*, 23: 46-51.

(福井大学教育地域科学部)

○オオトラカミキリのカラマツ食害例

オオトラカミキリ *Xylotrechus villioni* の寄主植物としてはエゾマツ、トドマツ、ハリモミ、トウヒの記録があり、北海道においてはこのうちエゾマツ、トドマツが報告されているが、筆者はカラマツにおいて本種の食痕を次のように観察したので報告する。

北海道浦河郡浦河町ラムシ沢, 23. V. 2001 (観察)。



本カラマツは林道沿いの日当たりの良い緩斜面に生えていたものであったが、既に枯れて倒れていた。オオトラカミキリ特有の渦巻状の食痕はカラマツの高さ2メートル程度の高さに位置しており、材の状態から数年前に羽脱したものと思われた。

当所はカラマツの他トドマツ、エゾマツも混生する二次林であるが、この他に本種の食痕を発見することはできなかった。

カラマツは北海道内でも多数植栽されているが、今まで本種による食害を聞いたことがない。また、近隣地域でカラマツを中心とした木材会社を長く経営している人に見せてもこの食痕を見たことは無いとのことであったため、当地域においても珍しい例であると思われる。

参考文献

- 日本鞘翅目学会編, 1984. 日本産カミキリ大図鑑. 565 pp., 96 pls. 講談社, 東京.
小島圭三・中村慎吾, 1986. 日本産カミキリ目シ食樹総目録. 336 pp. 比婆科学教育振興会, 広島.
(北海道札幌市, 柏崎 昭)

○朽木から得られたヒゲナガチャイロコメツキダマシの記録

ヒゲナガチャイロコメツキダマシ *Fornax (Serri-fornax) tumidicollis* REDTENBACHER, 1868 は、タイ、マレー、マカッサル、ミオンダナオ、ジャワ、台湾、沖縄、石垣島、西表島などに広く分布することが知られる種である。筆者は竹富島で海岸近くにあったぼろぼろになった朽木より得られた個体を検することができたので、ここに報告しておきたい。得られた個体のうち、4個体は体がまだ柔らかく体色も明るい茶色をしていたところから、蛹から羽化して間もないものと考えられた。この時期に新成虫となりそのまま外へ脱出するのか、それとも翌年まで朽木中にとどまるのかは判断できないが、この時期に新成虫になることを明らかにしておきたい。

BONVOULOIR (1872: 413-418) によると、本種には、4つの variety が知られているが、体長や形態に違いがあり、再検討が必要と思われる。

9 exs., 沖縄県竹富町竹富島, 24. VIII. 1997, 川田一之採集・筆者保管。

標本をご恵与頂いた川崎市の川田一之氏に厚くお礼申し上げる。

参考文献

- BONVOULOIR, H. A. de., 1872. Monographie de la famille des Eucnemides. *Annls Soc. ent. Fr.*, 40 (Suppl.): 289-560, pls. 22-36.
(東京都世田谷区, 鈴木 互)

○南大東島初記録のゲンゴロウ類

森・北山(2002)によると南大東島では、16種のゲンゴロウ類が記録されている。筆者は2003年3月に卒業旅行を兼ねて南大東島を訪れ、初記録となる2種を採集したので報告する。なお日本における南大東島特産種として知られていたマダラゲンゴロウ *Rhantaticus congestus* は、今回確認することが出来なかった。

チビコツブゲンゴロウ *Neohydrocoptus subvittulus* (MOTSCHULSKY)

5頭, 沖縄県南大東村北, 7. III. 2003, 筆者採集保管。

周囲の開けた明るい池の浅瀬において確認された。

チンメルマンセスジゲンゴロウ *Copelatus zimmermanni* (GSCHWENDTNER)

3頭, 沖縄県南大東村池の沢(大東神社), 6. III. 2003; 3頭, 同所, 7. III. 4. 2003, 筆者採集保管。

周囲が樹林で覆われた薄暗い池の浅瀬において確認された。

末筆ながら南大東島における情報を頂いた野村周平博士に厚く御礼申し上げます。

参考文献

- 森正人・北山昭, 2002. 改訂版図説日本のゲンゴロウ. 文一総合出版. 231 pp.
(環境科学株式会社, 上手雄貴)

台湾から発見されたデバナヒレアシコメツキについて

鈴木 互

Notes on *Rostricephalus vitalisi* FLEUTIAUX
(Coleoptera: Elateridae) from Taiwan

Wataru SUZUKI

デバナヒレアシコメツキ *Rostricephalus vitalisi* FLEUTIAUX は、カンボジアとトンキンの2カ所で採集された標本に基づいて FLEUTIAUX (1918) によって新属新種として記載された種であるが、のちに FLEUTIAUX (1936) は原記載であげた産地のひとつ“カンボジア”は疑わしいとして産地から外している。

本種に関する情報は非常に乏しく、タイプ標本以外にはこの地域から発見・記録される機会がなかったが、SUZUKI (1999) は台湾の羅金吉氏によって台湾中部で採集されたコメツキムシを調査している中で、本種と思われる個体を見だし、「台湾のコメツキムシ科目録」の中で記録した。その後も、台湾の標本があれば注意をしてきたが、とても珍しい種のように新たな個体は検するにはいたっていない。ここでは、先の目録の中で記録された個体の形態的特徴について紹介し、今後の資料として役立てたい。なお、本種の外形や雄交尾器が図示されるのは、これが最初である。

本文を書くにあたり、大変珍しい種を採集し、研究のためにご提供いただいた台湾省台中県の羅金吉氏にお礼申し上げます。

Genus *Rostricephalus* FLEUTIAUX, 1918

デバナヒレアシコメツキ属

Rostricephalus FLEUTIAUX, 1918: 252-253. [Type species: *Rostricephalus vitalisi* FLEUTIAUX, 1918].—

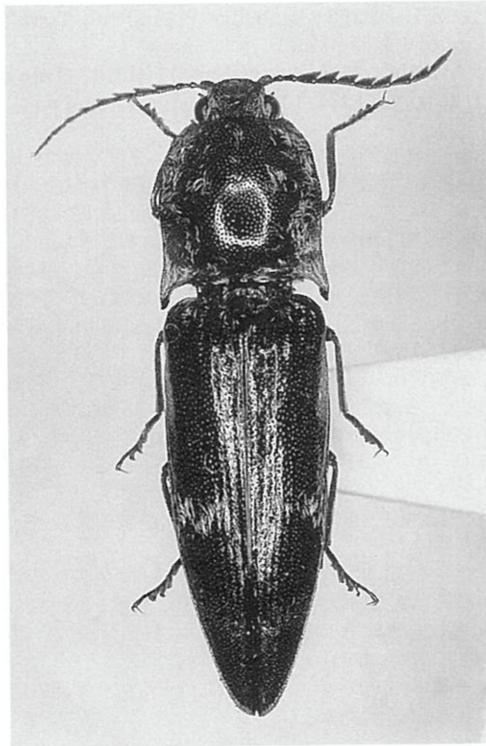


Fig. 1. デバナヒレアシコメツキ *Rostricephalus vitalisi* FLEUTIAUX, ♂, from Mt. He-wang Shan, Central Taiwan.

FLEUTIAUX, 1936: 285 [in *Senodoniinae*].—FLEUTIAUX, 1947: 238 [in *Rostricephalinae*].—GURJEVA, 1974: 106 [in *Oxynopterinae*].—STIBICK, 1979: 82 [in *Pityobinae*].—SUZUKI, 1999: 82 [in *Oxynopterinae*].
Rostricephalus [sic] FLEUTIAUX, 1924: 140.—SCHENKLING, 1927: 425 [in *Ludiinae*].

頭部は前縁が前方に伸び、前縁から中央部にかけて扇状に深く凹む。複眼は大きく半球状。前頭横隆溝は上下幅が広いが、中央で消失し、前方から見ると∞状を呈する。大顎は2歯状。触角は第3節より強く鋸歯状を呈する。前胸の後角隆起線は明瞭で長く、前胸基部3/4に達する。附節1~4節の下部には葉片を備える。第1節の葉片は小さく、2~4節のものは大きく明瞭 (Fig. 6)。爪は単純で、基部の剛毛を欠く。前胸腹板線は1重。前胸腹板突起の側面は広く、先端は「へ」の字型に切れ込む。

属の分類学的位置については、FLEUTIAUX (1918) が本属を設立した際に、*Hemilimerus* 属 (現在は *Senodonia* 属) と *Ludius* 属の近くに置かれたが、SCHENKLING (1927) は、ユングのカタログの中で、*Ludiinae* 亜科に置いている。FLEUTIAUX (1936) は、インドシナのコメツキムシをまとめた際、FLEUTIAUX (1918) の考えを踏襲して *Senodonia* 属の近くに置き、SCHENKLING (1927) により設立された *Senodoniinae* 亜科にふくめた。さらに、FLEUTIAUX (1947) は、インドシナのコメツキムシのレビジョンの中で、再び本属の所属について検討を試み、本属ために独立の亜科 (*Rostricephalinae*) を新設した。その後、しばらくの間この FLEUTIAUX (1947) の考えが踏襲されたが、GURJEVA (1973) は、胸部の形質を用いた研究から *Oxynopterinae* 亜科の一族にし、STIBICK (1979) は、爪が単純で基部に setae を備えないことや、中胸腹板と後胸腹板の境界がはっきりしていることなどを理由に、*Oxynopterinae* 亜科から外し、*Pityobinae* 亜科の一族としておさめている。SUZUKI (1999) は、*Oxynopterinae* 亜科と *Pityobinae* 亜科は同じグループと考え、本属を *Oxynopterna* 亜科の1族としている。

このように本属の所属については様々な意見があるが、現在のところ比較できる資料に限られるため、幼虫の形質はおろか、雌雄をあわせての形質の検討さえなされていない。今後は、これらの資料を満たした上での再検討が必要と思われる。

Rostricephalus vitalisi FLEUTIAUX, 1918

デバナヒレアシコメツキ (Figs. 1-6)

Rostricephalus Vitalisi FLEUTIAUX, 1918: 253 (Cambodge: Pnom-Penh, Tonkin: Chapa) [Syntype in Paris].
 —SCHENKLING, 1927: 425 (Cambodja, Tonkin).

Rostricephalus vitalisi: FLEUTIAUX, 1936: 285-286.—SUZUKI, 1999: 82 (Taiwan: Mt. He-wang Shan).

Rostricephalus [sic] *Vitalisi* FLEUTIAUX, 1924: 141 (Cambodge: Pnom-Penh, Tonkin: Chapa).

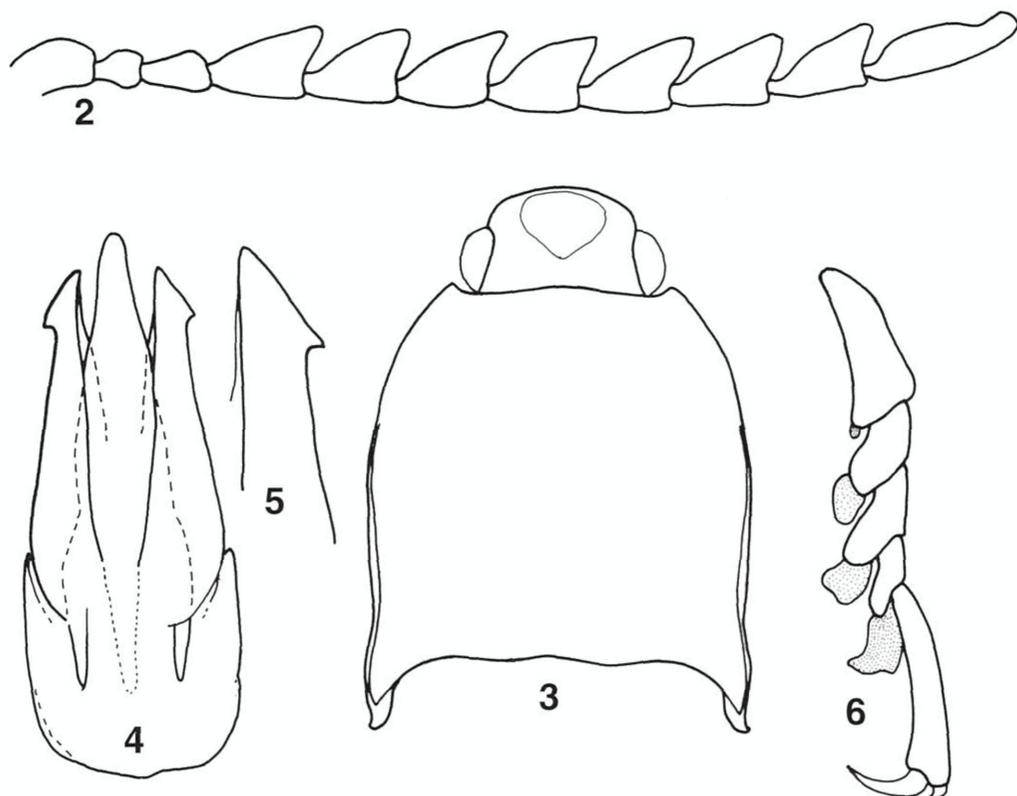
形態。体長: 15 mm。幅: 4 mm。体は細長い菱形。黒色で強い光沢を放つ。触角と脚は黒褐色だが、脚は背面部がやや明るい。頭部点刻は粗雑で、寝た黄白色毛を備える。頭幅 (複眼含む) は複眼幅の 3.8 倍。触角 (Fig. 2) は短く、先端節は前胸基部に届く程度。第2節は半球状で幅の 1.53 倍。第3節は円錐状で2節よりわずかに長く、幅の約 2 倍。3節~10節は強く鋸歯状。11節は細長く、幅の 3.58 倍。前胸 (Fig. 3) は四角、幅と長さは中央部で等しい。前胸前縁ははっきりと縁どられ、両側は中央で弱く弧状を呈し、後角手前で弱く波曲する。前角は鈍く尖り、後角は後方に突出し、先端は外側にわずかに捻られる。背面は強く膨隆するが、後角内側ではやや強く凹む。表面は丸くはっきりとした点刻で被われ、点刻間は滑らかで、強い光沢を放つ。中央部では、点刻間の距離は点刻の直径より明らかに広いが、外側にいくに従って間隔は狭くなり、側縁部では点刻間は点刻の直径より狭くなる。前胸背板は寝た毛で被われるが、中央では大変細かい微毛となる。小楯板は5角形で、ほぼ無点刻。上翅は細長く、基部の 2.56 倍。基部 1/4 から先端に狭くなる。条線は基部のみ存在が確認できる。間室はまばらに細かい点刻で被われる。上翅には黄白色毛で形成された2本の横帯をもつ。雄交尾器 (Figs. 4 & 5) は、基部の 2.7 倍。中央片は先に向かい細くなるが、その先端は鈍くとがる。側片は中央片より短く、亜先端角は後方外側へ短くのび、先端は尖る。

検視標本。1♂, 台湾省合望山, 10. VII. 1987, 羅 金吉採集 (筆者保管)。

分布: ベトナム北部, 台湾中部。

ベトナム北部の昆虫標本は、昆虫を専門に扱う業者によって日本に大量に持ち込まれているが、極めて珍しい種のためか、それとも産地が微妙に異なるためか、筆者はまだ本種と思われる標本をこの地域から見いだすにはいたっていない。タイプの産地とされるサバも今回発見された台湾の合望山も標高のある山地であるので、ベトナム北部と台湾を挟む地域の中でも、山地を中心に調査することができれば発見されるかもしれない。

本種は、一見シモフリコメツキ属 *Actenicerus* の仲間を思わせるが、頭部の特徴や、附節下部の葉片の存在により容易に識別することができる。



Figs. 2-6. デバナヒレアシコメツキ *Rostricephalus vitalisi* FLEUTIAUX, ♂.—2. 右触角 (left antenna).—3. 頭部と前胸背板 (head and pronotum).—4. 雄交尾器腹面 (male genitalia, ventral view).—5. 雄交尾器側片先端部腹面 (apical portion of paramere, ventral view).—6. 左中脚附節 (left midtarsus, lateral view).

参考文献

- FLEUTIAUX, E., 1918. Nouvelles contributions à la faune de l'Indo-Chine Française (Coleoptera Serricornia). *Annls Soc. ent. Fr.*, **87**: 175-278.
- FLEUTIAUX, E., 1924. Faune Entomologique de l'Indochine Française. I. Coléoptères Serricornes, Fam. Melasidae et Elateridae. *Opusc. Inst. scient. Indoch.*, (2): 1-184.
- FLEUTIAUX, E., 1936. Les Elateridae de l'Indo-chine Française. 6. *Annls Soc. ent. Fr.*, **105**: 279-300.
- FLEUTIAUX, E., 1947. Révision des Élatérides (Coléoptères) de l'Indo-chine Française. *Notes Ent. chin., Shanghai*, **11**: 233-420.
- GURJEVA, E. L., 1974. The thorax of click beetles (Coleoptera, Elateridae) and significance of its characters for the system of the family. *Ent. Obozr., Moskva*, **53**: 96-113, 95 figs. [In Russian].
- GURJEVA, E. L., 1974. The thoracic structure of click beetles (Coleoptera, Elateridae) and significance of the structural characters for the system of the family. *Ent. Rev., Wash.*, **53**: 67-79, 95 figs.
- SCHENKLING, S., 1927. Elateridae II. In JUNK and SCHENKLING, *Coleopterorum Catalogus pars* **88**: 265-636. W. Junk, Berlin.
- STIBICK, J. N. L., 1979. Classification of the Elateridae (Coleoptera).—Relationships and classification of the subfamilies and tribes—*Pacif. Insects, Honolulu*, **20**: 145-186, 1 fig.
- SUZUKI, W., 1999. Catalogue of the family Elateridae (Coleoptera) of Taiwan. *Misc. Rept. Hiwa Mus. nat. Hist.*, (38): 1-348.

(東京都世田谷区)

香川県善通寺市与北町で採集した水生甲虫類

藤本博文・上手雄貴

香川県善通寺市与北町谷(たに)は、讃岐平野のほぼ中央に位置する標高約50~70m程度の集落であるが、南北を標高100~150mの丘に挟まれ、字(あざ)の名称の通り谷状の地形をなしている。ここには農業用のため池が点在しており、その内の何箇所かはヒシ類やガマ類、タデ類などが繁茂し、水生昆虫の生息に適した環境となっている。筆者らは2000年~2002年にかけて当地で水生甲虫類の調査を行ったが、その際に四国未記録や香川県未記録のものも含め、多くの種を採集することができた。そこで、採集できた水生甲虫類のうち、種名が判明したものの記録をここに報告する。標本はそれぞれ採集者自身が保管している。

なお、四国、および香川県の記録の有無については、森・北山(2002)、出嶋(1998)を参照した。

コツゲンゴロウ科 Noteridae

1. キボシチビコツゲンゴロウ *Neohydrocoptus bivittis* MOTSCHULSKY

1頭, 9. VI. 2002, 上手採集; 3頭, 15. VI. 2002, 藤本採集 (Fig. 1)

全国的にも僅かしか産地が知られておらず、四国からはこれが初記録になると思われる。6月9日採集の個体は、ヒシの繁茂するため池から、6月15日採集の2個体は、灯火採集で得られた。灯火採集では、午後8時ごろから30分あまりの短い時間にたて続けに飛来したが、その後午前0時過ぎまで全く飛来しなかった。なお上手はこの他、2002年6月10日、7月28日にも、本種が初めて採集されたため池で追加個体を得るべく、かなり長時間にわたって調査を行ったが、再発見はできなかった。生息密度はかなり低いと思われる。

2. ムツボシツヤコツゲンゴロウ *Canthydrus politus* (SHARP)

1頭, 24. IX. 2000, 藤本採集; 1頭, 19. V. 2002, 藤本採集 (Fig. 2); 7頭, 9. VI. 2002, 上手採集; 3頭, 28. VII. 2002, 上手採集

香川県からはこれまで未記録であったと思われる。ヒシの繁茂するため池では多く見られたが、6月に行った灯火採集では飛来しなかった。



Fig. 1. キボシチビコツゲンゴロウ



Fig. 2. ムツボシツヤコツゲンゴロウ

ゲンゴロウ科 Dytiscidae

3. コマルケシゲンゴロウ *Hydrovatus acuminatus* MOTSCHULSKY

3頭, 19. V. 2002, 藤本採集; 13頭, 9. VI. 2002, 上手採集; 2頭, 15. VI. 2002, 藤本採集; 1頭, 28. VII. 2002, 上手採集。

5~7月にかけて多数個体が見られ、タデ類の密生する水際では特に個体数が多かった。6月15日採集の個体は、灯火採集によって得られたものである。

4. チビゲンゴロウ *Hydroglyphus japonicus* (SHARP)
2頭, 19.V.2002, 藤本採集; 1頭, 9.VI.2002, 上手採集.
5. ツブゲンゴロウ *Laccophilus difficilis* SHARP
1頭, 23.IX.2000, 藤本採集; 1頭, 9.VI.2002, 上手採集.
6. ルイスツブゲンゴロウ *Laccophilus lewisius* HARP
1頭, 24.IX.2000, 藤本採集; 1頭, 28.IV.2001, 藤本採集; 7頭, 9.VI.2002, 上手採集.
7. シャープツブゲンゴロウ *Laccophilus sharpi* REGIMBART
2頭, 23.IX.2000, 藤本採集; 1頭, 9.VI.2002, 上手採集.
8. マメゲンゴロウ *Agabus japonicus* SHARP
1頭, 28.IV.2001, 藤本採集; 1頭, 9.VI.2002, 上手採集.
9. シマゲンゴロウ *Hydaticus boweringii* CLARK
1頭, 15.VI.2002, 藤本採集.
灯火採集で得た.
10. コシマゲンゴロウ *Hydaticus grammicus* (GERMAR)
1頭, 24.IX.2000, 藤本採集; 1頭, 9.VI.2002, 上手採集.

ミズスマシ科 Gyrinidae

11. オオミズスマシ *Dineutus orientalis* (MODEER)
2頭, 14.VI.2000, 藤本採集.

ホソガムシ科 Hydrochidae

12. チュウブホソガムシ *Hydrochus chubu* BALFOUR-BROWN et M. SATO
3頭, 28.VII.2002, 上手採集.

最近まで四国からは未記録であったが、香川県では各地のため池に生息していることが明らかになった(高木, 2002; 三木, 2003)

ガムシ科 Hydrophilidae

13. ヒメガムシ *Sternolophus rufipes* (FABRICIUS)
1頭, 23.IX.2000, 藤本採集; 1頭, 9.VI.2002, 上手採集.
14. コガムシ *Hydrochara affinis* (SHARP)
1頭, 23.IX.2000, 藤本採集.
15. タマガムシ *Amphiops mater* SHARP
1頭, 9.VI.2002, 上手採集.
16. マメガムシ *Regimbartia attenuata* (FABRICIUS)
1頭, 9.VI.2002, 上手採集.

当地では今回報告した甲虫類の他にも、コオイムシ(藤本, 2003)や大型ミズムシ類(未発表)など、現在では全国的に希少となった水生半翅類の生息も確認されている。ただ残念なことに、いくつかの池にはブラックバスやブルーギル等の外来魚が放流されているようで、調査時にも、ルアーロッドを持った釣り人の姿が見られることがあった。外来魚の捕食圧が、これら貴重な水生昆虫類の生息に脅威を与えるのではないかと危惧される。

末筆になったが、標本写真を撮影して頂いた久米加寿徳氏(香川県高松市)、文献の入手にご協力頂いた出嶋利明氏(香川県綾歌郡)にお礼申し上げる。

参考文献

- 出嶋利明, 1998. 香川県産ゲンゴロウ類 Dytiscoides 文献目録. みせばや, (1): 8-16.
藤本博文, 2003. 中讃地区におけるコオイムシの採集記録. へりぐろ, (24): 73-77.
三木武司, 2003. ため池で採集された甲虫類の記録. へりぐろ, (24): 78-79.
高木真人, 2002. 四国初記録のガムシ. 月刊むし, (379): 47.
森 正人・北山 昭, 2002. 改訂版図説日本のゲンゴロウ. 231 pp.

(藤本: 香川県丸亀市; 上手: 環境科学株式会社)

○神奈川県におけるツヤナシコメツキダマシの記録

ツヤナシコメツキダマシ *Heterotaxis nipparensis* HISAMATSU 1957 は、東京都の Nippara で 1956 年 8 月 11 日に採集された 2♀ に基づいて HISAMATSU (1957) により命名記載された種である。その後、中根 (1984: 613) により屋久島が、久松 (1985: 47) により四国が分布に加えられている。強く鋸歯状の触角や光沢のない胸部など特徴のある種であるが、採集・記録される機会は少ないようである。筆者は、神奈川県で採集された♂ 個体を検する機会を得たので、ここに記録しておきたい。

1♂, 神奈川県山北町世附法行沢, 24. VI. 2002, 川田泰資採集。

報告するに当たり、標本をご提供いただいたの横浜市の川田泰資氏、神奈川県での記録についてご教示いただいた小田原市の平野幸彦氏にお礼申し上げます。

参考文献

- 久松定成, 1985. コメツキダマシ科. 黒澤良彦・久松定成・佐々治寛之編著, 日本甲虫図鑑 (III): 42-51 (pls. 8-9). 保育社, 大阪.
中根猛彦, 1984. 屋久島に産する甲虫類について. 屋久島の自然. 屋久島原生自然環境保全地域調査報告書, 587-631.

(東京都世田谷区, 鈴木 互)

○シモムラカクメコメツキダマシの雌の記録

シモムラカクメコメツキダマシ (新称) *Melasis tibialis* LUCHT, 1982 は、下村徹氏により 1978 年 5 月 8 日に台湾北部の拉々山 (Mt. Lala-shan) で採集された 1 個体の雄に基づいて命名記載された種である。その後、本種に関する記録は全くなく、雌は依然として未知のままであった。最近筆者は、丸山宗利氏を通して菅谷洋氏が台湾中部で FIT (SUGAYA et MARUYAMA, 2003: 12, fig. 2) で採集されたコメツキダマシ類の液浸標本を検することができたが、その中に本種の雌と思われる個体を見いだしたので、ここに図示し簡単に紹介したい。

小文を書くに当たり、貴重な個体を検する機会を与えてくださった国立科学博物館の丸山宗利博士および北海道大学の菅谷洋氏に厚くお礼申し上げます。

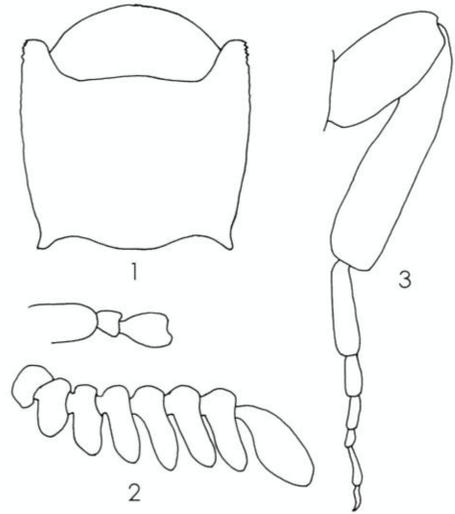
1♀, 台湾省南投県梅木 (Meimu, Nantou Hsien, Taiwan), 1,600 m, 5-10. V. 2002, 菅谷 洋採集。

体長: 7.40 mm; 幅: 2.05 mm. 体は筒状で幅の 3.95 倍。前胸はほぼ並行だが、前方にわずかに拡張する (Fig. 1)。色彩は茶褐色の上翅, 黄褐色の触角を除き黒褐色。触角は 5 節より弱く櫛歯状 (Fig. 2)。

本種の雄の脛節は他種にかなり幅広く、先端外角が突出するという特徴をもつが、雌では図示したように普通である (Fig. 3)。

台湾のカクメコメツキダマシは、他に *Melasis sinensis* LUCHT, 1982 が知られるが、上翅が茶色いことにより後者 (全体が黒色) と容易に区別できる。

FIT はハネカクシの仲間など地面に近いところ



Figs. 1-3. *Melasis tibialis* LUCHT, ♀, from Meimu, central Taiwan.—Fig. 1. head and pronotum.—Fig. 2. left antenna.—Fig. 3. left hind leg.

を飛翔している甲虫を採集するのに用いられているが、同時に設置された FIT からは、ナガコメツキダマシ属 *Isorhipis* の未記載種が 3 頭採集されており、コメツキダマシの仲間にも効果があるようだ。

参考文献

- LUCHT, W., 1982. Zwei neue *Melasis*-Arten aus Taiwan (Col., Eucnemidae). *Ent. Bl. Biol. Syst. Katfer*, 78: 15-19.
SUGAYA, H. et M. MARUYAMA, 2003. Additional record of *Triartiger klapperichorum* from Taiwan, collected by the use of Flight Interception Traps (Coleoptera: Staphylinidae: Pselaphinae). *Ent. Rev. Japan*, 58: 11-12.

(東京都世田谷区, 鈴木 互)

○ツマキケシガムシの記録

ツマキケシガムシ *Cercyon marinus* THOMSON, 1853 はシベリア, 中国北東部, ヨーロッパ, 北米などに広く分布する種であり、体長約 3 mm, 大半黒色で、和名が示すように上翅の後半部の縁と末端部が黄褐色であるので、同定は容易である。北海道にも産することになっているが、筆者は具体的な産地を知らない。図鑑などに図示されていないので、記録が少ないのかも知れない。特に珍しいものではないと思うが、ここに報告しておく。

13 exs., 北海道サロベツ兜沼, 26. VII. 2000, 筆者採集。

兜沼の湖岸で、ヨシなどの茂った落ち葉の下から採集した。

本種の国内分布についてご教示いただければ幸いです。

(神奈川県小田原市, 平野幸彦)

伊豆諸島のコメツキムシ類の記録

大平仁夫・楠井善久

Notes on some elaterid-beetles from the Izu Islands, Japan

Hitoo ÔHIRA and Yoshihisa KUSUI

伊豆諸島は東京都の南に列状に展開する火山島群で、伊豆七島とそれに付随する八丈小島と青ヶ島と鳥島、その他の小島からなっている。伊豆諸島のコメツキムシ類については、ÔHIRA (大平仁夫) (1969) をはじめ多くの記録があるが、伊豆諸島全体を通しての本科の分布相の実態はまだよく判明していない。しかし、沢田・渡辺 (1959) による八丈小島、沢田・渡辺 (1969) による御蔵島、渡辺・相馬 (1972) による三宅島などの島単位では詳しい報告も出されているし、八丈島の昆虫地理学的な考察は小西 (1951) が報告しており、伊豆大島の文献資料は大野 (1977) がまとめている。

筆者の一人である楠井は、2002年4月から7月にかけてこれらの島嶼を調査した。今回は1年間に七島すべてを回るつもりで調査したため、密度の高いデータでないが、一定の成果が得られたので報告することにした。なお、ここに記録する種の採集者はすべて楠井善久本人であるが、八丈島と青ヶ島は楠井陽子が協力した。その他、標本の同定は主として大平が行い、ここに記録する種は大平が保管している。

種の目録

1. *Lacon (Alaotypus) maenamii* (ÔHIRA, 1969) マエナミサビコメツキ
調査標本: 式根島, 28-VII-2002 (1♀).
伊豆諸島固有種である。式根島からは鈴木 (1981) が記録している。
2. *Cryptalaus berus* (CANDÈZE, 1865) ウバタマコメツキ
調査標本: 新島, 5-V-2002 (4♂). 式根島, 28-VII-2002 (1♂).
伊豆諸島からの記録は少なく、ÔHIRA (1969) が三宅島から、KISHII (岸井 尚) (1981) が八丈島から記録している。新島では、日中に海岸近くの低い松の混生している二次林内を複数個体が飛翔していた。
3. *Agrypnus (Agrypnus) binodulus binodulus* (MOTSCHULSKY, 1861) サビキコリ
調査標本: 伊豆大島, 6-VII-2002 (4♂). 式根島, 28-VII-2002 (1♂1♀). 青ヶ島, 28-IV-2002 (2♂2♀).
利島, 青ヶ島を除いて各島から記録されている。青ヶ島からはこれが最初の記録で、バナナトラップにきた唯一の種である。
4. *Agrypnus (Agrypnus) scutellaris scutellaris* (CANDÈZE, 1893) シロモンサビキコリ (図 1A)
調査標本: 八丈島 (大賀郷) (末吉~神子尾), 17-VII-2002 (2♂1♀).
琉球列島 (トカラ列島のノノ島以南) に分布する種である。雄交尾器を比較したが、琉球産のによく一致した。別亜種にするかどうかはさらに調査したいと考えている。幼虫は穿材性でないため、黒潮に乗って入ったとは考えにくい。図は体長 16 mm の雄個体。
5. *Agrypnus (Sabikikorius) fuliginosus* (CANDÈZE, 1865) ホソサビキコリ
調査標本: 式根島, 28-V-2002 (1♂).
伊豆諸島では、八丈島 (八丈小島, 青ヶ島も含む) を除いて各島から記録されている。式根島からは、大平 (1969) が記録している。
6. *Agrypnus (Colaulon) miyamotoi ishiharai* ÔHIRA, 1994 イズヒメサビキコリ (図 1D-F)
調査標本: 式根島, 28-V-2002 (1♂). 神津島, 25-V-2002 (3♂2♀). [青ヶ島, 28-IV-2002 (3♂2♀)].
本亜種の基準産地は三宅島であるが、鈴木 (2001) は神津島から記録している。また、青ヶ島からはこれが最初の記録であるが、基準産地産とは若干の形態に相違がみられる。将来は別亜種とすべきものと思われるが、ここでは上記亜種として記録するにとどめる。青ヶ島では山頂に近い地点で採集した。図 1D-F は式根島産雄。
7. *Meristhus (Sulcimerus) niponensis* LEWIS, 1894 スナサビキコリ
調査標本: 式根島, 28-V-2002 (3exs.).
主として乾燥した河川敷や海岸寄りの砂地帯に分布する種である。伊豆諸島からはこれが最初の記録である。空港の草地で採集した。
8. *Pectocera fortunei fortunei* CANDÈZE, 1873 ヒゲコメツキ
調査標本: 式根島, 28-V-2002 (2♂).
伊豆諸島からは、ÔHIRA (1969) が神津島から記録しているが、式根島からはこれが最初の記録である。

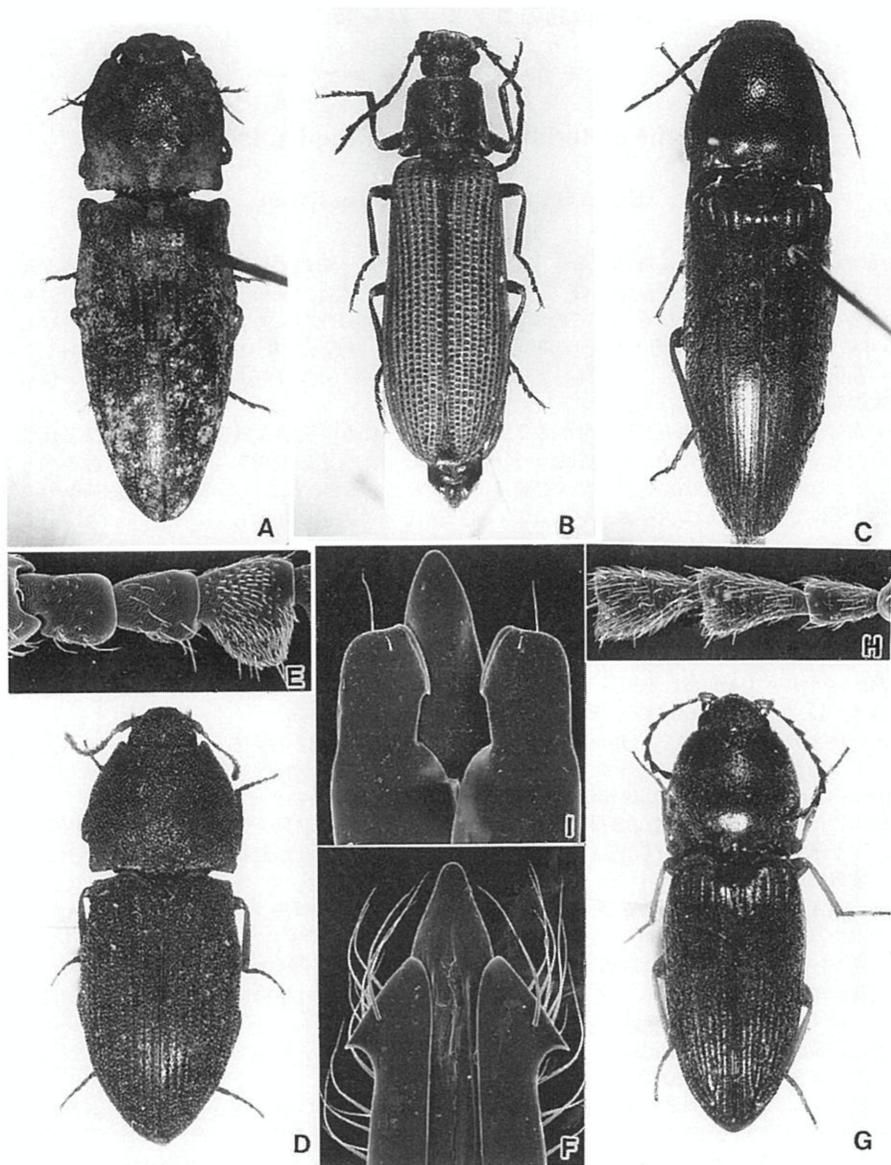


図1. A, シロモンサビキコリ (八丈島産, ♂); B, ベニコメツキ (利島産, ♀); C, リュウキュウシコメツキ (八丈島産, ♀); D-F, イズヒメサビキコリ (式根島産, ♂); G-E, アカアシコハナコメツキ (式根島産, ♂).

9. *Denticollis nipponensis nipponensis* ÔHIRA, 1973 ベニコメツキ (図1B)

調査標本: 利島, 4-V-2002 (1♀).

伊豆諸島からはこれが最初の記録である。前胸背板の斑紋や上翅はやや褐色を呈していた。これは、伊豆諸島の他の種にも見られる褐色化の傾向の一つではないかと思われる。図は体長 12 mm.

10. *Ampedus (Ampedus) vestitus watanabei* KISHII, 1979 イズケブカクロコメツキ

調査標本: 神津島, 25-V-2002 (1♂).

本亜種は、KISHII (1979) が三宅島産の個体に基づいて本州産の亜種として記載したもので、そのご、大平 (1984) は新島から記録している。雄の前胸背板は台形状で、腹部や上翅もやや褐色を呈することが多い。し

かし、神津島産の上記の個体の上翅は黒色であった。神津島からはこれが最初の記録である。図は体長 10.5 mm.

11. *Ampedus (Ampedus?) carbunculus* (LEWIS, 1879) ヒメクロコメツキ
調査標本: 伊豆大島, 6-VII-2002 (3♂).
伊豆諸島からは大平 (1969) が利島から記録しているのみで、伊豆大島からは未知と思われる。
12. *Mulsanteus junior junior* (CANDÈZE, 1873) ヒゲナガコメツキ
調査標本: 利島, 4-V-2002 (1♀). 新島, 5-V-2002 (1♀). 神津島, 25-V-2002 (1♀).
各地に広く分布する種で、各地の島嶼からも多く記録されている。伊豆諸島からは利島、新島、三宅島、御蔵島などから記録されている。神津島からはこれが最初の記録である。
13. *Melanotus (Melanotus) lewisi lewisi* SCHENKLING, 1927 ルイスクシコメツキ
調査標本: 八丈島, 17-VII-2002 (1♀).
伊豆諸島からは未知の種である。伊豆諸島からはイズクシコメツキ (*M. legatus masakianus*) が知られている。
14. *Melanotus (Melanotus) otobeanus* KISHII, 1988 ミクラクシコメツキ
調査標本: 神津島, 25-V-2002 (1♀).
御蔵島からの個体に基づいて新種として記載されたが、その周辺の島嶼にも分布する。一般外形はコガクシコメツキ (*M. erythropygus*) をやや大形にしたような種で、ときに体は暗褐色を呈する。
15. *Melanotus (Spheniscosomus) cete cete* CANDÈZE, 1860 アカアシオオクシコメツキ
調査標本: 利島, 4-V-2002 (1♂1♀). 新島, 5-V-2002 (1♂). 式根島, 28-V-2002 (1♂).
各地の雑木林に広く分布する種である。伊豆諸島からは八丈島 (八丈小島、青ヶ島も含む) を除いて大部分の島から記録されているが、式根島からはこれが最初の記録と思われる。
16. *Melanotus (Spheniscosomus) lochooensis* MIWA, 1929 リュウキュウクシコメツキ (図 1C)
調査標本: 八丈島 (末吉~神子尾), 17-VII-2002 (1♀).
琉球列島の奄美諸島などに分布する種である。八丈島産の種の中には、黒潮に乗って漂着したと思われる穿孔性の種がいることが報告されているが、本種の幼虫は土壤中に生息しており、サトウキビなどの根茎を加害することが知られている。おそらく植物の根茎などに混ざって入ったのではないかと思われる。雄個体が得られた段階でより詳しい形態の比較をしたいと考えている。図は体長 14.5 mm.
17. *Platynychus nothus* (CANDÈZE, 1865) オオハナコメツキ
調査標本: 伊豆大島, 6-VII-2002 (3exs.), 4-V-2002 (1ex.). 式根島, 28-V-2002 (2exs.), 25-V-2002 (3exs.).
伊豆諸島では利島、新島、式根島などから記録されており、伊豆大島からは鈴木 (2003) が記録している。
18. *Paracardiophorus sequens sequens* (CANDÈZE, 1873) アカアシコハナコメツキ (図 1G-I)
調査標本: 式根島, 28-V-2002 (10 exs.).
伊豆諸島からは ÔHIRA (1969) が新島から記録しているが、式根島からはこれが最初の記録である。式根島産の雌内部生殖器の袋内にある硬板のうち、小硬板は、大平 (1997) では基部まで深く切れ込むとしているが、この切れ込みには若干の変異があることが判明したので、さらに詳しい調査が必要になった。

引用文献

- KISHII, T., 1979. Some new forms and records of Elateridae in Japan and its adjacent area. Some new forms of Elateridae in Japan (XIV). *Annl. Rep. priv. Sch. Kyoto Pref.*, (17): 1-16, 5 pls.
- KISHII, T., 1981. Notes on Elateridae from Japan and its adjacent area (1), with the description of a new species (Coleoptera). *Bull. Heian High School, Kyoto*, (25): 17-25, 2 pls.
- 小西正泰, 1951. 伊豆八丈島の昆虫地理学的考察. *Bull. Biogeograph. Soc. Japan*, 15(2): 13-15.
- ÔHIRA, H., 1969. Notes on some species of Elateridae of the Izu Islands (Coleoptera). *Trans. Shikoku ent. Soc.*, 10: 41-48.
- 大平仁夫, 1984. 伊豆諸島のコメツキムシ若干種について. 月刊むし, (162): 35-36.
- 大平仁夫, 1997. 日本産コハナコメツキとその近似種について (甲虫目: コメツキムシ科). 比和科学博物館研究報告, (35): 1-16, 15 pls.
- 大野正男, 1977. 伊豆大島の昆虫相 (1). 文献資料編. 東洋大学紀要・教養課程篇 (自然科学), (20): 89-102.
- 沢田玄正・渡辺泰明, 1959. 八丈小島の昆虫相. 農学集報, 5(2): 49-62, 2 pls.
- 沢田玄正・渡辺泰明, 1969. 御蔵島の昆虫相. 農学集報, 14(1): 1-42, 4 pls.
- 鈴木 互, 1981. 伊豆諸島のコメツキムシ 8 種. 月刊むし, (130): 20.
- 鈴木 互, 2001. 伊豆諸島神津島で採集されたコメツキムシ 6 種. 月刊むし, (359): 43-44.
- 鈴木 互, 2003. 伊豆大島で採集されたコメツキムシ 6 種. 甲虫ニュース, (142): 14.
- 渡辺泰明・相馬州彦, 1972. 三宅島の昆虫相. 農学集報, 17(1): 1-58.

(大平: 愛知県岡崎市; 楠井: 兵庫県神戸市)

○対馬で採集されたコメツキムシ

2002年9月に大手町で開かれた昆虫フェアーの会場で、東京都の岸田泰則氏と群馬県の堀口 徹氏より、2002年に対馬で採集されたコメツキムシの標本をいただいた。会場では種名の確定はできなかったが、顕微鏡で調べてみると、興味ある種が含まれていたの、ここに報告しておきたい。

本報告をするにあたり、標本をご提供いただいた、岸田泰則氏と堀口 徹氏、対馬におけるスナサビキコリの記録についてご教示いただいた大平仁夫博士に厚くお礼申しあげる。

1. チョウセンサビキコリ *Agrypnus (Agrypnus) binodulus coreanus* KISHII, 1961

1 ex., 上県町棹崎, 11. V. 2002, 堀口 徹採集; 1♀, 山田山, 10. VIII. 2002, 岸田泰則採集。

大平(2002: 58-59)によると、韓国や済州島のものとは別種もしくは別亜種の関係にあるのではないかと指摘している。

2. ツシマヒメサビキコリ *Agrypnus (Colaulon) tsushimensis tsushimensis* ÔHIRA, 1986

12 exs., 上県町棹崎, 11. V. 2002, 堀口 徹採集。本種はハマベヒメサビキコリ *A. (C.) miyamotoi* の亜種として ÔHIRA (1986: 13, fig. 2) により記載されたが、その後、種に昇格されたものである。

3. スナサビキコリ *Meristhus niponensis* LEWIS, 1894

1 ex., 上対馬町茂木浜, 23. III. 2002, 堀口 徹採集。本種は、本州、四国、九州の海浜地域から多くの記録があるが、対馬から記録されるのはこれが最初のものである。調査できたこの個体は、翅鞘が明るい赤褐色で、斑紋がほとんど消失したものであった。もう少し個体数を揃えた上で、本州のものと比較をしたい。

4. フタモンウバタマコメツキ *Cryptalaus larva-tus pini* (LEWIS, 1894)

1♀, 山田山, 10. VIII. 2002, 岸田泰則採集。東南アジアに広く分布する種の亜種として区別されている。対馬のものは、以前は翅端の特徴などから亜種として区別されていたが、現在では上記のように改められている。

5. マダラチビコメツキ *Prodorastris agnatus* (CANDÈZE, 1873)

2 exs., 上県町棹崎, 11. V. 2002, 堀口 徹採集。

6. ヒメクロコメツキ *Ampedus carbunculus* (LEWIS, 1879)

1♂, 上対馬町泉, 4. V. 2002, 岸田泰則採集。雄は触角第3節から鋸歯状を呈するところから、*Pseudelater* 亜属(現在はホモニムで使用できず、*Miwaelater* 属として改められている)に入れられたりもしているが、グループとしては異なるようである。

7. ツシマオオナガコメツキ *Orthostethus sieboldi tsushimensis* ÔHIRA, 1997

1♀, 山田山, 10. VIII. 2002, 岸田泰則採集。

対馬の個体は、本州や九州のものに比べ小型であることや、触角の鋸歯状の程度が弱い等の点に違いが見られる。

オオナガコメツキの属名は、長いこと *Elater* 属が用いられてきたが、KISHII (1985: 23) はオオナガコメツキを基に *Nipponoelater* 属を設立した。大平(1997: 37) は、日本のオオナガコメツキの仲間を再検討し、*Orthostethus* 属のシノニムとしている。

8. アカアシオオクシコメツキ *Melanotus (Spheniscosomus) cete cete* CANDÈZE, 1860

1 ex., 上対馬町泉, 4. V. 2002, 岸田泰則採集。

9. オオクロクシコメツキ *Melanotus (Spheniscosomus) cribricollis* subsp.

3 exs., 上対馬町泉, 4. V. 2002, 岸田泰則採集。

日本のオオクロコメツキは、長い間種 *Melanotus restrictus* という学名で知られてきたが、KISHII (1999: 96) は、中国の *Spheniscosomus cribricollis* (FALDERMANN, 1835) のシノニムとした。大平(2001: 18) は、*Spheniscosomus* は *Melanotus* の亜属であるという日本での従来の考えを踏襲した上で、日本のものは別亜種として残している。

今回調査できた3個体の標本は、本州のものに比べ小さいことや、前胸背板の平滑な中央線を欠くなどの違いが認められた。地域によるものなのか、単なる個体変異なのか、今後、各地の個体を揃えた上で再検討したい。ここでは、とりあえず亜種名未決定のまま報告しておく。

10. クシコメツキ *Melanotus (Melanotus) legatus legatus* CANDÈZE, 1860

1♂, 山田山, 3. V. 2002, 岸田泰則採集; 1♂, 山田山, 10. VIII. 2002, 岸田泰則採集。

11. ツシマコガクシコメツキ *Melanotus (Melanotus) erythrogygus taishu* KISHII, 1994

上対馬町泉, 4. V. 2002, 岸田泰則採集。

12. ツシマコハナコメツキ *Paracardiophorus coreanus tsushimensis* KISHII, 1977

6 exs., 上対馬町茂木浜, 23. III. 2002, 堀口 徹採集。

ツシマコハナコメツキは最初、*P. musculus* の亜種として記載されたが、大平(1997: 10) により *P. coreanus* の亜種として処理され、現在に至っている。

参考文献

- KISHII, T. 1999. A check-list of the family Elateridae from Japan (Coleoptera). *Bull. Heian High School, Kyoto*, (42): 1-144.
- 大平仁夫, 1986. 日本産ヒメサビキコリ類について(コメツキムシ科). 越佐昆虫同好会々報, (63): 3-13, 6 figs.
- 大平仁夫, 1997. 日本産コハナコメツキとその近似種. 比和科学博物館研究報告, (35): 1-16, 14 pls.
- 大平仁夫, 1997. 日本産オオナガコメツキとその近似種について. 比和科学, (182): 37-44, pls. 1-5.
- 大平仁夫, 1999. 隠岐諸島のコメツキムシ類. ホシザキグリーン財団研究報告, (3): 223-237, 6 figs.
- 大平仁夫, 2001. 日本産クシコメツキ類の雌内部生殖器の

形態について (甲虫目: コメツキムシ科). 比和科学博物館研究報告, (40): 17-27, pls. 1-8.
 大平仁夫, 2002. 日本産サビキコリ属の形態について (I) (甲虫目: コメツキムシ科, サビキコリ亜科, サビキコリ属). 比和科学博物館研究報告, (41): 53-67, pls. 1-12.
 (東京都世田谷区, 鈴木 互)

○イボイボアナアキゾウムシの生態に関する知見

イボイボアナアキゾウムシ *Paramecops granulatulus* MORIMOTO, 1982 は東京の高尾山を原産地として, 記載された種で, 日本産アナアキゾウムシ類の中では希な種とされている. 筆者は 2003 年 5 月 27 日, 茨城県北茨城市関本町にある小川学術参考林の樹高 20 m のホウノキに登り, その花を摘み, 本種を 2♂, 6♀♀ 採集した. これ以前に 1992 年 9 月下旬から 10 月上旬にかけて岩手県雫石で採取したホウノキの実を割り, 新成虫と老熟幼虫を確認している. (この時の同定は森本 桂先生にお願いした.) このことから, イボイボアナアキゾウムシはホウノキの花 (というよりすでに実になりかけたといった方がいいような) に集まり, 交尾, 産卵する. そして, 秋に幼虫は実ごと地面に落ち, 実の中で春まで過ごし, ホウノキの花の咲く頃に実から成虫が脱出し, すぐに花のある高い位置まで上がり, そこを生活空間としていると推定される.

採集の上手な森本先生が, これまで, ほとんど採集されていないのはこのゾウムシの生活圏が地面と



ホウノキの樹冠部のせいだと思われる. そして, 茨城県つくば市にある森林総合研究所内にもホウノキは多数植栽されているが, ホウノキの実にはこのゾウムシの寄生は認められなかった. すなわち, ホウノキ天然木の残っていて地上部が湿った環境でないと生活できない昆虫だと考えられる. なお, 模式標本は高尾山で 1961 年 6 月 11 日採集された個体, 副模式標本は群馬県谷川, 1956 年 6 月 3 日, 栃木県奥日光, 1969 年 6 月 15 日採集個体でいずれも, これらの地域のホウノキの花の時期と一致する.

なお, 1992 年に同定をお願いした森本 桂先生, 調査でお世話になった独立行政法人森林総合研究所, 高橋一規, 柴田銃江両主任研究官に厚くお礼申し上げます.

参考文献

- MORIMOTO, K. 1982. The family Curculionidae of Japan. I. Subfamily Hylobinae. *Esakia*, (19): 51-121.
 (独立行政法人 森林総合研究所, 榎原 寛)

○アカメガシワの花外蜜腺に集まるタマムシ類

トウダイグサ科アカメガシワの葉の基部にある一対のすり鉢状花外蜜腺に集まるタマムシ類を観察したので報告する. 2003 年 7 月 20 日, 奄美大島瀬戸内町油井岳でアカメガシワ若木の葉上にミドリナカボソタマムシ *Coraebus hastanus oberthueri* LEWIS が多数, 認められた. 各葉に 1 個体ずつ, とまり, 葉の基部の花外蜜腺からの分泌物を食べていた. 約 20 個体観察したが, 大半は葉の基部に集まっていた. 一部個体は葉の基部以外にとまり, 葉の表面をかじっていた. アカメガシワの花外蜜腺は若葉をすぎた頃から蜜を分泌するようになる. この蜜をアリが利用していることは, よく知られている. そして, 花外蜜腺以外にも若葉, 若枝表面に吹き出す food body と呼ばれる物質を出すことが知られている (岩見・幸島, 1996). 沖縄での本種の食性として, アカメガシワの葉の表面をパッチ状に削り取るように後食することが報告されている (堀, 1996). これらのことを考えあわせると, ミドリナカボソタマムシ成虫は主に若葉の花外蜜腺からの分泌物を食する. そして, 葉の表面を削り取るようにしても食べるが, これは food body を食べている可能性がある. この点に関しては今後の調査を期待する. 今回の観察ではミドリナカボソタマムシの他, ムネアカチビナカボソタマムシ *Nalanda rutilocollis ryukyensis* KUROSAWA も同様の食性をしていることが明らかになった. また, アリが花外蜜腺に集まっているのも観察されたが, タマムシを排除するような行動は認められなかった. 以上のことから, アカメガシワは若葉を食葉性昆虫から守るために花外蜜腺を利用し, 葉の補食量を落とすような対捕食者防衛戦略をとっているとも考えられる.

なお, 文献などで便宜をはかって戴いた (独)森林総合研究所の石田 厚樹木生理研究室長および浜口

京子昆虫管理研究室主任研究官に厚くお礼申し上げます。

引用文献

堀 繁久, 1996. ミドリナカボソタマムシ. 沖縄県昆虫野外観察図鑑, 6: 74-75.
 岩見京子・幸島司郎, 1996. アカメガシワの謎～動物を意識した構造～. 日本動物行動学会第15回大会講演要旨: 101.
 (独立行政法人 森林総合研究所, 横原 寛)

○茨城県におけるヤトセスジジョウカイの記録

ヤトセスジジョウカイ *Athemus yato* (TAKAHASHI) は, 東日本の低湿地に生息するジョウカイボン類である. 高野・大桃(2000)によると, 茨城県からの記録は無いようであるが, 筆者は次のように採集しているので報告する. なお上記の文献では, 名古屋周辺に分布する同属のセスジジョウカイ *Athemus magnius* ISHIDA が挙げられているが, 茨城県に両種とも分布するの否かは, 今後の検討を要する.

2♂2♀, 茨城県鉾田町当間, 28. IV. 2002.

雑倉正人採集・保管.

生息地は谷津田状の, 耕作が放棄された湿地である. いずれも上翅の黄色部が拡大した型であった.



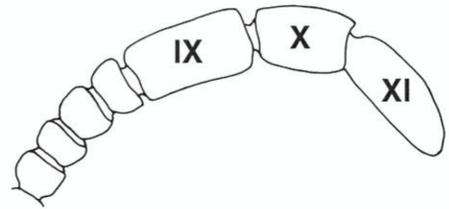
参考文献

高野 勉・大桃定洋, 2000. 茨城県産甲虫リスト. るりぼし(23): 2-155.
 (東京都文京区, 雑倉正人)

○対馬におけるクロコメツキダマシの記録

クロコメツキダマシ *Euryptychus vicinus* FLEU-TIAUX, 1922 は, 似た種が多い日本のコメツキダマシの中でも, 黒く, 比較的大型であることや触角先端3節(Fig. 1)が他に比べ著しく長いという特徴的を持つことから識別は容易な種である. これまでに北海道, 本州, 四国, 九州から記録があるが, 久松(1985, 1989)によると, 対馬からの記録はないようである. 筆者は, 対馬において採集された個体を所持しているのここに記録しておきたい.

1 ex., 長崎県上県群上対馬町比田勝, 30. VI. 1996, 新田慎悟採集.



参考文献

久松定成, 1985. コメツキダマシ科. 黒澤良彦・久松定成・佐々治寛の編著, 原色日本甲虫図鑑(III): 42-51 (pls. 8-9). 保育社, 大阪.
 久松定成, 1989. コメツキダマシ科. 九州大学農学部昆虫学教室・日本野生生物研究センター・共同編集, 日本産昆虫総目録I: 346-348. 九州大学農学部昆虫学研究室. 福岡.

(東京都世田谷区, 鈴木 互)

甲虫ニュース 第143号

発行日 2003年9月20日
 次号は2003年12月下旬発行予定
 発行者 高桑正敏
 編集者 鈴木 互(編集長), 長谷川道明, 川島逸郎, 奥島雄一, 吉富博之
 発行所 日本鞘翅学会 〒169-0073東京都新宿区百人町 3-23-1 国立科学博物館分館動物研究部昆虫第2研究室 ☎ 03-3364-2311
 印刷所 (株)国際文献印刷社
 年会費 6,000円(一般会員)
 郵便振替口座番号 00180-3-401793

昆虫学研究器具は「志賀昆虫」へ

日本ではじめて出来たステンレス製有頭昆虫針00, 0, 1, 2, 3, 4, 5, 6号, 有頭ダブル針も出来ました. その他, 採集, 製作器具一切豊富に取り揃えております.

〒150-0002 東京都渋谷区渋谷1丁目7-6

振替 00130-4-21129

電話 (03) 3409-6401 (ムシは一番)

F A X (03) 3409-6160

(カタログ贈呈) (株)志賀昆虫普及社